MINDAS Series of Working Papers | 05

National Institutes for Humanities (NIHU) Project
"Integrated Area Studies on South Asia (INDAS-South Asia)"

近現代インドにおける音楽伝統と社会的レジリエンス

ーラージャスターン世襲楽師コミュニティの民族誌に向けてー

Musical Tradition and Social Resilience in Modern India:

Toward an Ethnography of the Hereditary Musician's Community in Rajasthan

田森 雅一
Masakazu TAMORI

Integrated Area Studies on South Asia
INDAS

MINDAS
Centre for South Asian Studies at the National Museum of Ethnology

MINDAS Working Papers No. 5
February 2022

近現代インドにおける音楽伝統と社会的レジリエンス
――ラージャスターン世襲楽師コミュニティの民族誌に向けて――

Musical Tradition and Social Resilience in Modern India:
Toward an Ethnography of the Hereditary Musician's Community in Rajasthan

田森　雅一

Masakazu TAMORI

人間文化研究機構プロジェクト地域研究推進事業「南アジア地域研究」
NIHU Project Integrated Area Studies on South Asia

近現代インドにおける音楽伝統と社会的レジリエンス
――ラージャスターン世襲楽師コミュニティの民族誌に向けて――

田森　雅一*

Musical Tradition and Social Resilience in Modern India:
Toward an Ethnography of the Hereditary Musician's Community in Rajasthan

Masakazu TAMORI

要旨

本稿は、インドのラージャスターン州の州都ジャイプルに居住し、サーランギーという擦弦楽器とタブラーという打楽器の演奏を生業としてきたムスリム世襲楽師集団（ミーラースィー・コミュニティ）の音楽伝統と社会組織についての研究である。ニューマンは、西ラージャスターンにおける楽師コミュニティの社会組織についての研究から、彼らの集団成員性とアイデンティティに関わる 3 つの組織原理、すなわち、(1) 父系出自の原理、(2) 婚姻関係の原理、(3) 村落群の原理を抽出したが、それらのなかで、男性成員のアイデンティティに関わる出身村落と村落集団に関する村落群の原理については不明な点が多いとしている［Neuman 2010］。本稿では、それら 3 つの組織原理に加えて、ミクロな民族誌的視点からの「社会規範に基づく行動原理」に焦点をあて、近代インドにおける彼らの音楽伝統の変容と社会的レジリエンスの関係の一端について考察してみたい。

* 愛知大学国際コミュニケーション学部・教授
Professor, Faculty of International Communication, Aichi University

Abstract

This paper explores the musical tradition and social organization of the *Mīrāsī* community of hereditary Muslim professional musicians who mostly perform with *sāraṅgī* (upright fiddle) and *tablā* (percussion instrument). This community has long inhabited Jaipur, Rajasthan's capital city in India. Neuman [2010] identified three major principles operating in the formation of group membership and identity of musician communities in western Rajasthan: the principles of (1) patrilineal descent, (2) affinal relationships, and (3) village cohorts, with the third being the most obscure. In this paper, in addition to these three principles, I especially focus on social norms and the principles of behavior from the perspective of micro-ethnography, and then discuss the relationship between the transformation of musical tradition and enduring social resilience.

1. はじめに／問題の所在

インドにおけるグローバル化の流れは、1991 年のラオ政権下における経済自由化路線への転換によって加速されたことは間違いない。以後、インドは BRICs の一角として位置づけられ、高い経済成長率を実現し、ヒト・モノ・カネ・情報のフローの拡大と環流はインド社会と人々の生活に大きな変化を与えてきた。しかし、インド世界のグローバル化は 1990 年前後になって突如として始まったものではない。今日のインド世界は、経済自由化以前からのプレリミナルなグローバル化の流れが、交通・通信手段と各種メディアの発達、例えば衛星放送やインターネットによる情報アクセスへの簡便化・共有化によって進展し、情報の周縁に置かれていた人々をも巻き込んで人間の思考や行動に新たな局面をもたらしている状態にあると考えられる。ここでの新たな局面とは、世界的な均質化と地域的な多様化が同時進行する今日的世界を特徴づけるグローカル化の現象的側面に留まらず、人々の意識的選択と戦略性のもとに外部の多様性を取り込んで展開するローカリティの発現形式を意味する。

本稿の目的は、変化の激しい近現代において、社会化の古典的な場としての家族・親族を基盤とする伝統的実践共同体／コミュニティが人間と文化形式の再生産にどのように向き合い、その職能と系譜を維持すると同時にローカルな歴史を形成してきたのかという問題について民族誌的記述を通して探求することにある。このような問題への関心は、アパデュライが文化人類学の古典的課題として指摘した「文化が急激に変化している時代における文化適応をめぐる問題」［アパデュライ 2004: 87］と通底している。その今日的課題は「グローバル化され脱領土化された世界にあって、生きられた経験としてのローカリティの本質は何か」という問いとなり、その解明には新たな民族誌が必要であるとアパデュラ

イは主張する［ibid.: 108-109］。彼の言う新たな民族誌とは、ローカル化をあからさまに志向することなく社会生活における想像力の役割に注目するものであり、インドはそのような地域研究を試行する格好の現場であるという。いうまでもなく社会生活における想像力の主体は、グローカル化が進展する世界の個人や集団と言えるが、そのエージェンシーに影響を与え、社会的レジリエンスの基底をなしているのは伝統的な組織原理と考えられる。

北インド古典音楽とラージャスターン民俗音楽の社会的世界について探求したニューマンは、音楽家のローカルな社会組織を観察し考察することで彼らのグループ化された行為パターンと社会的アイデンティティの基盤が理解可能になると考えた［Neuman 1990, 2010, 2015］。彼は北西ラージャスターンの音楽芸能者にアンケート調査を行い[1]、サンプル数の多いマーンガニヤール（*Mānganiyār*）[2]、ダーディー（*Ḍhāḍhī*）またはダーリー（*Dhāṛī*、以後ダーディーと記述）[3]、ドーリー（*Dholī*）[4]、ランガー（*Rangā*）[5]という 4 つの楽師カーストの出身村落の分布やネットワークなどを地図上で可視化した［Neuman, Chaudhuri and Kothari 2006］。そして、ラージャスターンにおける楽師カーストの成員性とアイデンティティ形成に関わる重要な組織原理として、（1）父系出自の原理、（2）婚姻関係の原理、（3）村落群の原理の 3 つを抽出した［Neuman 2010: 255］。

このようにニューマンは、ラージャスターンの楽師カースト／コミュニティの組織研究のための貴重な情報と視点を提示してくれているのだが、調査対象や研究方法などに関して留意すべき点がいくつかある。ニューマンの調査地域はジョードプルを中心とする北西ラージャスターンに限定され、ジャイプルを中心とする北東ラージャスターンなどについては検討の範囲外になっている。このような調査地域の違いは、楽師カーストの地理的分布の違いにも現れる。例えば、ニューマンの場合はマーンガニヤールやランガーの記述が中心となっているが、彼らは北東ラージャスターンには居住していない。また、その手法がアンケートを中心とする定量的調査であることから[6]、村落や都市における社会組織の実態・実情を捉えたミクロな民族誌記述が希薄にならざるをえない。ニューマンの主要な関心の一つは音楽の大伝統／古典音楽／都市と小伝統／民俗音楽／村落との相互作用に向けられているのだが、都市におけるコミュニティの形成過程と、その背景にある都市と村落の婚姻ネ

---

[1] 調査データは 1989 年から 91 年にかけて何段階かに分けて収集されたもので、46 カースト、2,111 人。主要カースト・グループと人数は、マーンガニヤール 926 人、ダーディー379 人、ドーリー181 人、ランガー177 人、その他 448 人である［Neuman, Chaudhuri and Kothari 2006: 10-14］。

[2] マーンガニヤールは民俗歌謡と独特な形態の擦弦楽器などを演奏するムスリムであるが、彼らのパトロンは主にヒンドゥーである。詳細については Kothari［2001］などを参照のこと。

[3] ラージャスターンのダーディーは民俗歌謡とデーシ・サーランギーと呼ばれる擦弦楽器などを演奏するムスリムが大多数で、彼らのパトロンの多くはヒンドゥーである。詳細は後述する。

[4] ドーリーは打楽器と管楽器を演奏するヒンドゥーまたはムスリムで、彼らの主なパトロンはヒンドゥーのラージプートである［Neuman, Chaudhuri and Kothari 2006: 256-269］。

[5] ランガーは民俗歌謡とスィンディー・サーランギーと呼ばれる擦弦楽器を演奏するムスリムで、彼らのパトロンはスィンディー・シパーヒーと呼ばれるヒンドゥー・ラージプートから改宗したムスリムである。詳細については Kothari［1972, 1973］などを参照のこと。

[6] ただし、英領インド帝国期の国勢調査や民族誌に基づく諸カーストの記述と考察や、短期的な定性的調査に基づく記述も含まれている。

ットワークによって構成される親族・婚姻圏（後述）のあり方、そして社会的レジリエンスの重要な源泉の一つと考えられる社会規範や行動原理について検討するための具体的調査結果はほとんど示されておらず、ミクロな民族誌的調査に基づく資料の補完と検討が求められる。

本稿では、ラージャスターン州の州都ジャイプルに居住するミーラースィー・コミュニティの音楽伝統と社会組織に焦点を当て、彼らの組織原理と行動原理について検討する。ミーラースィーは北西インドにおいてムスリム世襲音楽家の総称として用いられるほか[7]、北インド古典音楽の社会的世界ではムスリム伴奏者のカテゴリーに用いられる［Neuman 1990: 125］。また、ラージャスターンの社会的特質の一つとして、それぞれのカーストには敬称・通称・蔑称の 3 つの名称があるとされ［Kothari 2001: 205］、ミーラースィーは民俗音楽世界におけるムスリム音楽芸能者の敬称として用いられる[8]。本稿では、都市部を中心とする北インド古典音楽世界においてミーラースィー、ラージャスターンの村落部を中心とする民俗音楽世界においてダーディーと自称あるいは他称される人々をダーディー・ミーラースィー（*Ḍhāḍhī-Mīrāsī*）と仮称して焦点を当てる。

今日ジャイプルで生活するダーディー・ミーラースィーは、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、ジャイプル藩王国の周辺地域からジャイプル宮廷に職を求めて移住してきた第一世代の末裔たちである。第一世代はジャイプルの宮廷や花街においてマーンドと呼ばれる民俗歌謡の歌手や古典音楽の器楽伴奏者として活動していたが、1930 年代以降に生まれた第二世代はインド独立とともにラージプート宮廷を中心とするパトロンの庇護を失った。彼らの新たな雇用主は大学・音楽学校やラジオ放送（All India Radio、以後 AIR）であったが、常勤職ポストの数は限られ安定した職業につけるのは一握りの者たちであった［田森 2012, 2013］。そのため、1980 年代になると新たな音楽活動の場と個人的なネットワークを求めてフランスなどの海外に渡る第三世代が出現するようになり、そこでの成功モデルの環流は彼らの音楽伝統に変化をもたらす要因の一つになって今日に至っている［田森 2021a, 2021b］。また、大学で音楽理論や多種類の楽器演奏法を学び、大学院で修士号や博士号を取得した者たちがおり、一族の音楽伝統ではないシタールなどの主奏楽器を学ぶ若者たちも増えている。さらに、1980 年代後半以降に生まれ、国内外の大衆音楽を聴いて育った第四世代の中には、映画音楽の歌唱やフュージョン音楽の演奏にも長け、インディアン・アイドルやインディアズ・ゴット・タレントといったグローバル・フォーマットを有するオーディション・テレビ番組に個人あるいはグループで出演して顔が売れ出した者たちがおり、そのマーケティング効果も見過ごせない［田森 2016］。他方、ジャイプルのような大都市で生まれ育った者と村落で生まれ育った者との間の社会的アイデンティティの乖離や

---

[7] ミーラースィーはアラビア語で「遺産」や「継承」を意味するミーラース（*mīrās*）を語源とし、北インドではムスリム楽師の総称として用いられることが多い。彼らの大部分は 13 世紀以降のイスラーム支配のもとでヒンドゥー教から改宗した系譜語り・歌詠者の末裔と考えられている［Singh 1998: 2299］。

[8] コーターリーは音楽芸能カーストの事例としてマーンガニヤールを取り上げ、敬称はミーラースィー、蔑称はドームあるいはカミーンとしている［Kothari 2001: 205-206］。しかし、その一方、英領インド帝国期の国勢調査や民族誌では、ミーラースィーは総じて女性芸能者の伴奏を行う低カーストとして記述され、今日までそれらの記述が引用されてきた［田森 2011］。

国内外でグローバルに音楽活動する者とローカルな世界でやむなく非音楽的単純労働に従事する者との間で社会経済的な格差が生じている。

しかし、このような1980年代以降の社会経済的環境変化と音楽活動の個人化／グループ化にもかかわらず、彼らは大都市における伝統的コミュニティの結束、すなわち社会的レジリエンスを保ち続けているように思われる。本稿では、ニューマンが指摘した3つの組織原理を分析概念として援用しつつ、ジャイプル市N地区のミーラースィー・コミュニティの成立の歴史、音楽伝統と社会組織の民族誌的記述と検討を行い、最終的にはこれまで指摘された組織原理だけでは捕捉できない彼らの社会規範と行動原理についての考察を行う。

次章では、北インドにおける音楽ジャンルと音楽家の位置付けについて、ムガル帝国およびジャイプル藩王国の資料をもとに概観したのち、ミーラースィーとして記述された人々の19世紀後半からインド独立後までの動向について検討してみたい。

2. 北インド古典音楽とラージャスターン民俗音楽

2–1. インド音楽世界における大伝統と小伝統

インドの伝統音楽世界には大伝統的なマールガ（*mārga*）と小伝統的なデーシー（*deśī*）や[9]、理論的・学問的なシャーストリーヤ（*śhāstrīya*）と地域的・民衆的なローカ（*loka*）という分類概念があり[10]、いずれも前者は古典音楽に、後者は民俗音楽に概ね対応するものとして位置付けられてきた[11]。このうち古典音楽はラーガ（*rāga*）という「旋律の法則」とターラ（*tāla*）という「拍節周期の法則」に基づいて演奏される汎地域的なもので、中世以降の発展の違いによって南インド古典音楽（カルナータカ音楽）と北インド古典音楽（ヒンドゥスターニー音楽）の二系統に分かれる。前者がヒンドゥー教の帰依信仰と結びつき[12]、寺院などでの歌曲演奏が中心であるのに対して、後者はイスラーム宮廷を中心に発達した即興演奏が中心で、ガラーナー（*gharānā*）と呼ばれる流派によってその音楽が継承されてきた［田森 2015; Tamori 2008］。そのため、今日の北インドの音楽家たちの多くはかつての宮廷楽師、すなわち地方の有力宮廷でのガラーナー形成に貢献したムスリム世襲楽師の子孫か、19世紀後半以降に彼らから音楽を習ったヒンドゥー高カースト出身者である。例えば、弦楽器シタールの演奏で世界的に有名になったラヴィ・シャンカルの師匠はムスリムの宮廷楽師であった[13]。

---

[9] マールガとデーシーについては、8世紀頃に成立したとされるマタンガ著『ブリハッデーシー（*Bṛihaddeśī*）』に記述がみられる［Sharma 1992］。また、16世紀末の『アクバル会典（*Ā'īn-i Akbarī*）』には「マールガは神々や聖仙たちに帰せられる気高いスタイルで、土地が異なっても変わることなく最大の敬意をもって吟詠されるのに対し、デーシーは地域的な特色が大きい」とある［Allami 1994: vol.Ⅲ, 265］。

[10] インドにおける「フォーク」概念の変遷については井上［2012］を参照のこと。

[11] 大伝統とシャーストリーヤ・サンギート（古典音楽）、小伝統とローク・ギート（民俗音楽／民謡）との対比については［Neuman 2015: 138, n2］を参照のこと。

[12] 南インドにおける宗教と音楽・芸能との結びつきなどについては小尾［2020］を参照のこと。

[13] ラヴィ・シャンカルの師匠はマイハール宮廷の楽師長を務めたことなどから、マイハール・ガラーナーの創始者と言われる。その出自については諸説ある［McNeil 2004: 157］。

今日のヒンドゥスターニー音楽の発展は、ムガル帝国第 3 代皇帝アクバル（在位 1556–1605）の宮廷に、インド内外から集められた楽師とその子孫たちの寄与によるところが大きいと考えられる[14]。彼らの多くはヒンドゥー高カーストあるいは音楽芸能カーストからイスラームへの改宗者で、その出自は多様であったが、優れた楽師はカラーワント（*Kalāwant*）などのタイトルを与えられて厚遇される時代が約 100 年続いた。しかし、第 6 代皇帝アウラングゼーブ（在位 1658–1707）の時代になると楽師たちは冷遇され、デリーやアーグラーなどの中央宮廷からラクナウやジャイプルなど地方の有力宮廷への移動を余儀なくされた[15]。このような楽師たちの中央宮廷から地方宮廷への移動と定着、そして在地の楽師との交流が、ヒンドゥスターニー音楽のガラーナー形成を促したと考えられる。

古典音楽に対し、民俗音楽は地域によって多様性の見られる音楽であり、町村に暮らす人々の娯楽のために演奏されてきた。その担い手たちは、村落におけるパトロンの系譜語りや人生儀礼・祭礼における音楽演奏を生業とする職能カーストに属する人々である。彼らのなかから、いつごろ、どのようにして古典音楽のラーガやターラを学ぶ者が現れ、地方宮廷におけるカラーワントとして位置付けられ、都市におけるコミュニティを形成して行ったのか十全には明らかにされては来なかった。これまでのインド音楽の研究においては、古典音楽と民俗音楽は別々のジャンルとして研究される傾向にあり、中世以降の古典音楽の成立に民俗音楽がどのような影響を与えてきたのか、また二つの音楽ジャンルの相互作用について、村落から都市および都市から都市への移動、そしてそれに伴う社会的ネットワークの維持と変化という視点から検討した音楽民族学的・社会人類学的研究はアードマン［Erdman 1978, 1985］やニューマン［Neuman 1990, 2015］を別とすれば希少であった。

次節では、今日のラージャスターン州の州都ジャイプルにおけるムスリム世襲楽師コミュニティの成立過程、そして彼らの音楽伝統と社会組織について検討するにあたり、古典音楽と民俗音楽の相互交渉の事例として、ジャイプル宮廷の歴史と音楽に関連する組織制度を取り上げる。

2–2. ジャイプル宮廷とグニージャン・ハーナー略史

ジャイプルは、ドゥンダール地方を支配するラージプートのカチワーハー（Kachwaha）氏族の王ジャイ・シング 2 世（Sawai Jai Singh II、在位 1699–1743）によって建設された城郭都市である[16]。この城壁によって囲まれた旧市街は、英領インド帝国期からの都市計画によっ

---

[14] ロビンソンの『ムガル皇帝歴代誌』には、アクバルは「音楽にも多大な援助をあたえミヤーンターンセーンなど一流の音楽家を宮廷に呼び寄せた」［2009: 197］とあり、クローの『ムガル帝国の興亡』では「アクバル自身が音楽を大変愛したので高官もそれにつられて自分たちの館に音楽家を集めた。一種の「国民音楽」のようなものがアーグラに出現した」［2001: 324］と記述されている。

[15] ロビンソンは「（アウラングゼーブの治世では）宮廷でイスラーム以外の祝典を行うことは、飲酒や阿片の摂取と同じく禁止された。それと同時に、ヒンドゥスターン音楽の発達に多大な貢献をはたした保護も打ち切りとなった」としている［2009: 237］。クローによれば「禁忌食物、飲酒、娯楽など、イスラームの教えに背くものはことごとく禁止された。楽士も、歌姫も歌手もみな宮廷を離れた。（中略）しかし、デリーや敬虔なムスリムが住む都市以外では宮廷に楽師を呼んで、酒も飲んでいた」という［2001: 232-234］。括弧内筆者付記。

[16] ジャイプルの建設が開始され、王都アンベールからジャイプルに遷都したのは 1727 年とされる。王の

て南方と西方に向かって新市街を形成し、現在ではラージャスターン州の州都となっている。旧市街を囲む城壁や主要道路に沿う建造物は赤砂岩からなるため、ピンク・シティとも呼ばれている[17]。その中央には「月光の宮殿」と呼ばれる王宮や「風の宮殿」と呼ばれる後宮が立ち並び、花街も残されている。

ジャイ・シング 2 世がジャイプルを創設した時期は、アウラングゼーブの死後、帝位の継承問題や財政難、マラーターなどの台頭や近隣地域の独立など、ムガル帝国が分裂・衰退へと向かう動乱の時代と重なる。彼は、それまで王都であったアンベールからジャイプルに遷都するにあたり、王室の政治・軍事・祭礼を司るために、36 部門からなるムガルの組織制度を採用した［Bahura 1976: 12; Roy 2008: 58］。その組織には、太鼓部屋、管楽器部屋、女性音楽堂、男性音楽堂、音楽舞踊修練場などの音楽関連部門も含まれていた。なかでもさまざまなジャンルの楽師たちを集めたグニージャン・ハーナー（*Guṇījan khānā*）は、ジャイプル藩王国における音楽の社会組織を理解するには最も重要な部署とされる［Erdman 1978: 359］。グニー（*guṇī*）は質の高さを、ジャン（*jan*）は人々を、ハーナー（*khānā*）は家／区画／部屋などを表すことから「芸術家部屋」と訳出可能であろう。太鼓部屋や管楽器部屋が軍楽を中心とするムガル・モデルの継承・模倣であったのに対して、グニージャン・ハーナーはジャイプルなどラージャスターンに独自の部門であった[18]。

アウラングゼーブが宮廷楽師を解雇しはじめたのは 1688 年ころからとされる［Ikram 1964: 251］。熟練し尊敬を集めていた音楽家たちの多くは、新しいパトロンを求めて次第にデリーから離れていった。ジャイ・シング 2 世がジャイプルに遷都したのはアウラングゼーブの死後 20 年が過ぎた 1727 年のことである。その間に 6 人の皇帝が交代し、各地にはムガル帝国からの独立や自治を目指す動きが活発化していた。ジョードプルを中心とするマールワール王国やウダイプルを中心とするメーワール王国など、ラージャスターンの諸王国もその例外ではなかった。そのような時代に、新たな組織制度のもと、それまでの軍楽を中心とする楽師たちに加え、新たなパトロンを求めてデリーなどからやってきた宮廷楽師たちとラージャスターンの民俗音楽の楽師が集められたのがグニージャン・ハーナーである。前者はジャイプルにおいてもカラーワントと呼ばれる一方、マーンド（*māṇḍ*）と呼ばれるラージャスターン特有の歌謡や、擦弦楽器サーランギー（*sāraṅgī*）[19]で古典声楽の伴奏を行う後者の楽師たちはミーラースィーと呼ばれたと考えられる。ニューマンは北インド古典音楽の社会的世界を、ガラーナーの母体となった主奏者のカテゴリーとしてのカラーワントと伴奏者のカテゴリーとしてのミーラースィーに二分して考察したが［Neuman 1990: 125］、ジャイプル宮廷においてもその二分法は概ね当てはまると言えるだろう。カラ

名前に由来するジャイプルはインドで最初の計画都市とされる。2011 年の国勢調査によれば、人口は約 663 万人で、2 位のジョードプルの約 369 万人を大きく引き離している。

[17] ちなみに、ジャイプルをピンク・シティと呼ぶのはラーム・シング 2 世が 1876 年にヴィクトリア女王の息子アルバートを招いて歓待するために旧市街の建物をピンク色に装飾したことに由来する。

[18] 同様な部門はジョードプル藩王国ではターリーム・ハーナー、ウダイプル藩王国ではサンギート・プラカーシュと呼ばれた［Chaudhri 1995: 40-44］。

[19] サーランギーは弓で弦を擦って音を出す弦楽器。その楽器と音楽・音楽家などについては、Bor［1987］や Magriel［2021］が詳しい。

ーワントたちの多くが中央宮廷からリクルートされて降りてくる大伝統的な古典音楽の楽師であったのに対して、ミーラースィーたちは村落からリクルートされて地方都市の宮廷に奉仕する小伝統的な民俗音楽の楽師たちであったと考えられる。

カラーワントは当初、一代限りの称号であったが、その子孫たちによって世襲されたり、時には土地の支配者からラージャスターン出身の楽師たちにも与えられたりと、その称号を名乗る者は増え続けたと推測される。ジャイプルほどの規模はなかったものの、隣接するシェーカーワーティー地方のスィーカル宮廷にも楽師たちが集められていた[20]。彼らの中には、藩王からカラーワントの称号を与えられた者たちもいた［Chaudhri 1995: 86］。現在もその末裔とその親戚たちは、スィーカル市内にとどまってコミュニティを形成し、後述するジャイプルのコミュニティとも婚姻関係を有している[21]。ジャイプルをはじめとするラージャスターンの藩王や領主たちは、ムガル帝国が急速に求心力を失ない、イギリス支配が強まる中で、音楽家たちの有力なパトロンとなっていったのである。

ある村落の長老によれば、グニージャン・ハーナーでの音楽会は二部構成になっており、前半はドゥルパドやハヤールなどの古典音楽で、後半がマーンドなどの民俗音楽というのが一般的で[22]、王そして貴族や臣下は前半をまじめに聞き、後半はお酒を飲みながらリラックスしてその音楽を楽しんだ[23]。マーンドは王家・領主のために歌われるもので、戦場への戦士の送り出しの歌、戦勝の歌、勇敢な祖先・英雄を讃える歌、男女に関するものや子供の誕生を喜ぶ歌など様々な内容のものがあり、ジャイプル、ジョードプル、ウダイプルなどの宮廷によってその歌詞の内容や用いられる方言が異なっていたという。

グニージャン・ハーナーはラーム・シング 2 世（Ram Singh II、在位 1835−1880）の時代が最盛期であった。その当時のトップ・グループには、伝説的な楽聖ミヤーン・ターンセーンの子孫のアムリット・セーン（Amrit Sen、1813−1893）や、今日のダーガル一族の流祖にあたるベフラーム・ハーン（Behram Khan、?−1880）など錚々たる楽師たちが控えていた［Azizuddin 2000: 39-43］。ラーム・シング 2 世は自ら音楽を習うほどの音楽好きであったが、その後の後継者たちは音楽には余り関心を示さなかったようである。ラーム・シング 2 世が亡くなって間もない 1882 年、ジャイプルのグニージャン・ハーナーは 19 のカテゴリーに分かれ（**図表 1**）、総勢 161 人が在籍していた［Chaudhri 1995: 53］。このうち最大のカテゴリーが声楽や楽器演奏にたずさわるカラーワントで総勢 54 人。この部門に割り当てられた予算はグニージャン・ハーナーのトップを占めていた。

それが、マードー・シング 2 世（Madho Singh II、在位 1880−1922）の時代になると[24]、その予算に大きな変動がみられる。1905−1906 年には在籍人数はほぼ一緒にもかかわらず予算

---

[20] この地方の支配者の祖先は、カチワーハー氏族に連なる。

[21] スィーカル市での調査（2018 年 12 月 27−28 日）。

[22] 北インド古典音楽のラーガにマーンドがある。ここではラーガの種類ではなく、ラージャスターン地方特有の民俗音楽ジャンルとして用いられている。

[23] ナーガウル県 K 村の長老へのインタビュー（2017 年 12 月 27 日）。

[24] マードー・シングはラーム・シング 2 世の逝去の直前に養子となり、18 歳で藩王の地位を継承した人物である。彼は学校や病院や博物館などの近代化に努める親英改革派であった。

図表 1　ジャイプル宮廷グニージャン・ハーナーの人数と予算の推移

項目／年代	1882	1905-6	1914	1920	1933	1944-45
カテゴリー数	18	13	13	13	14	14
No／呼称	人数／予算	人数／予算	人数／予算	人数／予算	人数／予算	人数／予算
1. 管理者	3／不明	4／909	4／966	4／853	4／829	5／829
2. カラーワント	54／14,579	44／7,870	46／7,662	40／9,570	21／6,688	21／6,688
3. サーランギー（擦弦楽器）	15／1,484	23／1,832	21／1,252	21／3,356	13／1,782	13／1,782
4. パカーワジ（両面太鼓）	16／1,423	16／1,373	17／1,349	16／1,741	12／1,414	12／1,387
5. ハルカ（小間使い）	14／728	14／729	13／710	13／1,059	6／880	6／787
6. カタック	6／4,138	11／4,942	10／4,658	11／6,379	8／9,431	8／5,760
7-17 は省略	20／？	17／694	16／927	27／1,396	8／1,110	8／1,110
18. バグタン／タワーイフ	34／10,939	33／9,429	34／9,114	36／10,213	20／7,429	17／5,400
19. その他	—	—	—	—	1／240	1／-
合計人数／総予算（Rs.）	161／41,045	162／28,352	161／27,510	168／32,253	92／29,985	90／21,600

出典：Chaudhri［1995: 53-54］（Hindi）の Table. 4 と Table. 5 をもとに筆者作成

が削られ[25]、三分の二にまで縮小されている。また、カラーワントの予算は、タワーイフなどの女性芸能者に逆転されているのが目に付く。しかし、給与平均が最も低く待遇が悪かったのは弓奏楽器サーランギーなどで伴奏を務めるミーラースィーであった。その後の更なる待遇の悪化により、カラーワントたちの中にはジャイプルを離れる者がおり、ラージャスターンの他の有力宮廷、カルカッタ（コルカタ）を中心とするベンガル地方やボンベイ（ムンバイ）を中心とするマハーラーシュトラ地方、バローダー（ヴァドーダラー）を中心とするグジャラート地方などの有力パトロンのもとに移動していったと推測される。最終的にグニージャン・ハーナーを含む 36 部門の組織体制は、インド独立を前後して解体された。

グニージャン・ハーナーにおいては、その成立からインド独立まで 200 年以上にわたって宮廷音楽が発展し、声楽のハヤール、主奏弦楽器のビーンとシタール、舞踊のカタックという三つのジャンルにわたるジャイプル・ガラーナーの母体となった。そして 20 世紀に入って、ジャイプル・ガラーナーはラクナウ・ガラーナーやグワーリヤル・ガラーナーなどと並んでヒンドゥスターニー音楽の「ブランド」の一つ、すなわち「国民文化」として扱

[25] 当時カラーワントの頂点にいたのは、セーニヤーのシタール奏者ニハール・セーン（Nihal Sen）で、一人で約 1,420 ルピーを得ていた［Erdman 1985: 78］。この額は、年間予算の 5 分の 1 近い数字である。

われるようになるのである。

その一方、生活の問題を抱えたのは、主奏者のガラーナーとは異なるコミュニティを形成していたミーラースィーたちである。村落を離れることでジャジマーンとの関係を失い、都市においてはパトロンである宮廷の庇護を失うことにより、生活基盤が不安定になったことは言うまでもない。印パ分離・独立に際して、彼らの中には一族や家族単位でパキスタンに移住して行った人々も少なくない。インドに残った人々の中で、ラジオ局付き音楽家や学校での音楽教師という安定した職業に就くことができなかった者は、花街の芸妓に音楽を教えたり、その伴奏を行ったりすることで糊口をしのがざるをえなかった者もいた。その一方、生活の糧となるジャジマーンとの伝統的関係を失った村落の人々は都市の親戚を頼り、仕事を求めてやってくる人々が増加していったのである。

そもそも彼らが、いつごろどのようにしてジャイプルに居住するようになり、コミュニティを形成していったのか。また彼らはどこから、どのようなネットワークのもとやって来たのか。次章では、その歴史と婚姻関係のネットワークについて検討してみたい。

3. ジャイプル・ビラーダリーの歴史と音楽伝統の変容

3-1. ジャイプル・ビラーダリーの形成

伝統的生業を同じくし、婚姻関係の連鎖によってジャイプル市内の N 地区を中心に形成されたミーラースィーのコミュニティあるいは同胞集団を、本稿では「ジャイプル・ビラーダリー Jaipur Biradari」（以後、JB と略記）、また N 地区以外に居住する同胞たちを含める場合には単にビラーダリーと表記することにする[26]。JB は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、ジャイプル県の近隣諸地域の村落出身者とその親戚縁者たちを中心に形成されていったと考えられる。

この JB の中核となった人物の一人が、マウラー・バフシュ・ダーウスィー（Maula Bakhsh Dhawsi、以後マウラー・バフシュ）である[27]。今日彼は伝説的な人物となっており、ジャイプルのグニージャン・ハーナーには今も彼の写真が飾ってあるとされ[28]、1922 年の宮廷記録からは、カラーワントの 6 番目に同名の楽師を見出すことができる［Chaudhri 1995: 50］。しかし、マウラー・バフシュの男系子孫が印パ分離・独立期にパキスタンに渡ったこともあり、正確な生没年や詳細な情報については現時点では不明である。彼の孫娘の子孫や、複数のインフォーマントからの情報を総合すると 1860 年代前後に生まれ、1940 年代後半に亡く

---

[26] ビラーダリーとはペルシャ語で兄弟・同胞を意味するビラーダル（*birādar*）から派生した言葉である。インドのイスラーム社会においては共通の起源を有する者同士や社会的地位・職業を同じくする同質的社会集団で、婚姻サークルを意味することもある［Ahmad 1976: 336; Alavi 1976: 1-2］。インド社会におけるムスリムの「カースト」研究の問題点については小牧［2000］を参照。

[27] 本稿の第 3 章および第 5 章では、歴史上の人物を実名で取り上げている。また、インタビューにおいては事実確認的な内容に限定し、許可を得た人物の一部を実名で提示している。なお、第 6 章の談話では、インフォーマント名は匿名としている。

[28] 2019 年 12 月時点では未確認。

なったと推測される。すなわち、彼がジャイプルの宮廷で活動したのは 1880 年代から 1930 年代、藩王ラーム・シング 2 世からマードー・シングへというグニージャン・ハーナーの予算が次第に縮小されていく時代であったと言えるだろう。なお、彼の専門は古典声楽のドゥルパドとダマル、そしてシャードラと呼ばれる十拍子の歌謡であったらしい[29]。村落出身の彼が誰からどのようにして古典音楽を学び、カラーワントとして位置づけられたのかその経緯については調査を継続中である。

当初マウラー・バフシュは、今日ピンク・シティと呼ばれる城郭内に住居を構えたが、親戚や娘婿の一族が村落地域から移住してくることによって大所帯となり、1920 年代頃から現在の N 地区に彼らを集住させるようになったようである。N 地区はピンク・シティの西門にあたるチャンドポール門から北西に開けた土地の一部である（**地図 1**）。ピンク・シティの北部は丘陵になっており、その頂上にはナーハルガル砦（Nahargarh Fort）がそびえ立つ。ジャイプル旧市街の背後の丘陵に建設されたこの山城からはジャイプル市を一望でき（**写真 1**）、現在その一部はホテルとして観光客にも開放されている。N 地区は、この切り立った丘陵の西側の麓に広がった荒地を開拓した土地である（**写真 2**）。そのためか、N 地区のヒンディー語名称を邦訳すれば「牝虎の住居」ということになる。

現在の N 地区の全体人口は不明だが、JB を形成する人々の人口は 1,500 人から 2,000 人と推測される[30]。N 地区は複雑な街路によって区画された幾つかの街区に分かれ、彼らは以下の 4 街区に分かれて暮らしている。

A 街区：11 家族、約 200 人。そのうち音楽家は 40〜50 人。

B 街区：8 家族、約 200 人。音楽家は 40〜50 人。

C 街区：約 50 家族、800〜1,000 人。音楽家は 200 人前後と推定。

D 街区：約 30 家族、400〜500 人。音楽家はほとんどいない。

ピンク・シティの城郭内に住んでいたマウラー・バフシュが娘婿の家族や親戚を最初に住まわせたのが A 街区で、その後に道路を挟んで隣接する B 街区に居住空間が拡張された。この二つの街区は交通の便が良く、N 地区の中心道路に隣接している。

印パ分離・独立期にパキスタンに渡った者たちがいる一方で、二つの街区に残った家族の親族が村落から移住してきたのが C 街区である。この C 街区の外縁は、切り立った丘陵とそこから崩れ落ちる礫や流砂によって形成された荒野で、雨季には崖から水が流れ出すような危険な土地である（**写真 3**）。そして、N 地区の人口がさらに増加したことにより、本来は人が住むのが困難なその荒野に人が住むようになったのが D 街区である。

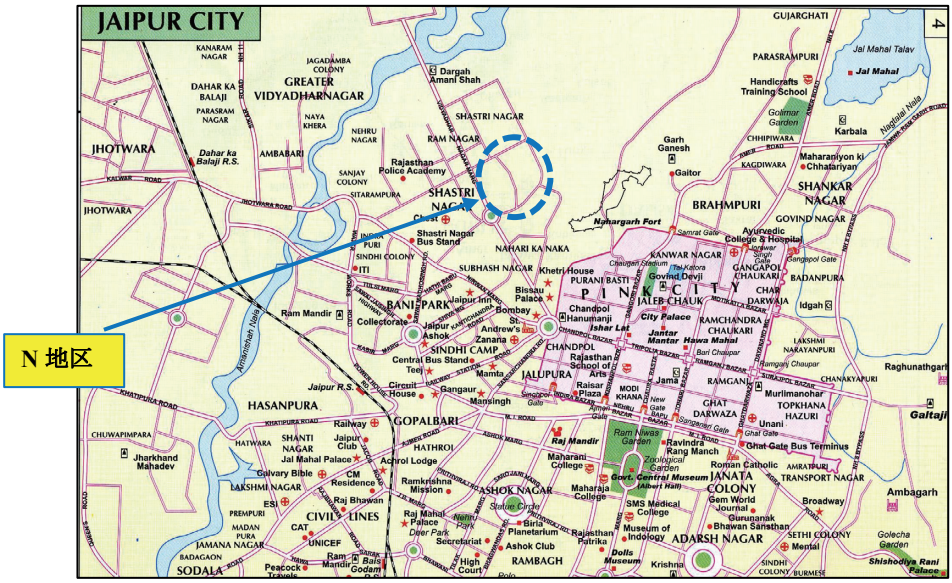
この 30 年間で海外とのコネクションを有する者たちが増え、経済的に豊かになった者たちのほとんどは A 街区と B 街区で生まれ育った者たちである。インド独立前後に生まれ育った者たちはジャイプル宮廷との関係を失う一方、ラジオ放送局付き音楽家や学校の音楽

---

[29] マウラー・バフシュの孫娘ジャムニージーの次男（1955–）へのインタビュー（2014 年 1 月 10–11 日および 2019 年 12 月 27–29 日）。

[30] 2018 年 12 月および 2019 年 12 月の現地での聞き取り調査より。N 地区以外のジャイプル居住者を含めると 3,000〜4,000 人くらいと推測される。

地図 1　ジャイプルの旧市街（ピンクシティ Pink City）と N 地区（青丸内）



地図出典：［Arya 2010: 4］

ピンク色の地域が城壁で囲まれた旧市街。N 地区は、その北西のナーハルガル砦 Nahargarh Fort のある丘陵の麓の荒地を開拓した地域（地図上への破線楕円と矢印の付加は田森による）。

写真 1 ナーハルガル砦の一部からのジャイプル市の眺望（2016 年 12 月、田森撮影）。

写真 2 N 地区の A 街区からナーハルガル砦のある丘陵を望む（2019 年 12 月、田森撮影）。

写真 3 丘陵の麓の D 街区。流砂が見られ、雨季には浸水する家屋もある（2018 年 12 月、田森撮影）。

教師など新たな職位を得る者が現れるようになった。その一方で、それらの職を得られなかった者たちの中には、ピンク・シティ内に残ったコーター（*koṭhā*）と呼ばれる花街において、タワーイフ（*tawāif*）あるいはムジュラー（*mujrā*）と呼ばれる芸妓たちに音楽を教えたり、伴奏を行ったりすることで生計を立てる者たちがいた[31]。しかし今日、A 街区と B 街区に居住する人々で、コーターに出入りする者たちは見当たらない。彼らの多くは、インド内外でのコンサート活動や音楽関連の仕事で生計を立てている者が多く、コーターに関わることを不名誉なことと見なしている。それに対して、C 街区に暮らす者たちの中には、今でもコーターと関係しながら生計を立てざるをえない者たちもいる。A 街区と B 街区で暮らす男性の多くは音楽に関係する職業についているが、C 街区で暮らす男性の多くはタクシー運転手など音楽以外の職業についている者の方が多く、D 街区においては音楽関連の職業に就く者はほとんどいない。

3–2. ジャイプル・ビラーダリー（JB）における婚姻関係と海外ネットワーク

ここで、ジャイプル・ビラーダリーの中核となったマウラー・バフシュ・ダーウスィーの家族構成と、彼らのパキスタン移住後に JB の中心となった一族の親族関係について明らかにしておきたい。

詳細は次章に譲るが、JB の構成員である証は、その人間の帰属が「出身村名とゴート名」によってコミュニティの人々に共有されていることである。マウラー・バフシュの場合は、シェーカーワーティー県スィーカル郡出身の「サーンワローダー村のダーウスィー」が JB 内のアイデンティティということになる。このうち「ダーウスィー」は、ゴート（*got*）と呼ばれる祖先に関係する名前である（後述）。ゴートは日常生活の中で名前の一部として用いられることは滅多にないが、彼の場合は特別に添えられて識別されていると考えて良いだろう。彼らの名前の多くは、例えばアーミル・ハーンのように、個人名の後にハーン（Khān）が用いられる。しかし、この 30 年で事情は変わり、ゴートを名前の一部として用いるケースも増えている。この嚆矢となる事例については次節で紹介する。

さて、マウラー・バフシュは三男四女をもうけた。長男と三男は古典声楽を継承し、次男のアフメド・バフシュ（Ahmed Bakhsh、1890–1975）は擦弦楽器サーランギーと歌謡を専門とした。長男と三男には男児がなく、次男アフメドは二男一女をもうけた。しかし、印パ分離・独立に際して、長男と三男、そしてアフメド・バフシュとその 2 人の息子はパキスタンに渡ったため、インドには男系子孫は残されていない。ジャイプルの N 地区に留まったのは、マウラー・バフシュの娘婿の 2 家族と、アフメド・バフシュの娘ビスミッラー（通称ジャムニージー Jamuni-ji、1928–2016）とその夫の家族であった。これらの、マウラー・バフシュの家族に関する情報の多くは、ジャムニージーの次男とその家族などへのインタビューから得られたものである[32]。

---

[31] 北インドにおける花街と音楽の関係については田森［2018: 530-531］を参照。

[32] 2013 年 1 月から 2019 年 12 月までのほぼ毎年の継続的インタビューに基づく（2019 年 12 月 27–29 日）。

マウラー・バフシュの 4 人の娘、モーリー（Mauli）、フォーリー（Fauli）、ローリー（Lauli）、ジュラオー（Jurao）が嫁いだ家族のうち、今日でも N 地区で暮らし、国内外で精力的な音楽活動をしているのは長女モーリーが嫁いだスィーカル県の「G 村出身のカーワー（*Kāwā*）」（以後、カーワー）と、次女フォーリーと四女ジュラオーが嫁いだ「S 村出身のゴーチャー（*Gochā*）」（以後、ゴーチャー）である。本稿では、最初にゴーチャーの家系について短く触れ、次にカーワーの家系について、その系譜と今日に至る音楽活動を重ね合わせながら、その音楽伝統の変化について検討してみたい。

3-2-1. ゴーチャーの一族　スィーカル宮廷とオランダ・コネクション

ゴーチャーの中興の祖は、S 村からスィーカル宮廷に出仕したデーヴジー（*Devjī*）という、18 世紀後半の人物にさかのぼる。その子孫によれば、彼は砲兵（*topacī*）であったという。おそらくは、軍楽家として採用され、英領インド帝国期には宮廷楽師としてスィーカル宮廷に定着したと推測される。S 村を出てスィーカルに居住するようになったこの一族は、デーヴジーの名にちなんでデーワーカ（*Devāka*）とも呼ばれている。このように故地を離れ、新たな土地／宮廷で名を成した人物がいると、その子孫はその中興の祖の名前で呼ばれ、他の村落のゴーチャーや同じ村落出身の一族とも別格に扱われるようになるのである。

スィーカル宮廷にも、インド独立前まで複数の楽師が召し抱えられていた。むしろ、ジャイプル・ビラーダリーよりも以前からミーラースィーのコミュニティが形成され[33]、シェーカーワーティー地方における古典音楽の発展に重要な役割を果たしてきたと考えられる。スィーカル宮廷には、少なくとも 3 つの一族が現地出身のカラーワントとして何代にも渡って召し抱えられていた［Chaudhri 1995: 86-87］。その一つが、世界的に有名になったサーランギー奏者スルターン・ハーン（Sultan Khan、1940–2011）を輩出した「D 村のスィードワー（*Sīdwā*）」の一族（巻末資料：**写真 4**）、そしてゴーチャーの一族である[34]。

マウラー・バフシュの次女ローリーを娶ったゴーチャーのワズィール・ハーンは、デーヴジーの曾孫にあたる。そして、彼の息子が打楽器タブラーで有名になったヒダーヤト・ハーン（Hidayat Khan、1923?–2013）である。彼は、幼少の頃までは一族の世襲楽器である擦弦楽器サーランギーを学んでいたが、カタック舞踊に憧れを抱き、著名な舞踊家に入門を願い出たという[35]。しかし、その師匠はまずそのリズムパターンを知るために打楽器を学ぶべきことを説いた。彼は次第にタブラーにのめり込み、やがてデリー・ガラーナーの師匠について本格的に学ぶようになる。1950 年代になると、その演奏が認められ、ボンベイの国営ラジオ放送（AIR）にスカウトされ、局付きの常勤音楽家となった。その後、タブラーを学

ジャムニージーの子孫によれば、アフメド・バフシュの孫たちはパキスタンのカラチ近郊に住んでおり、現在も彼らとメールなどでのコミュニケーションがあるという。

[33] スィーカル市のビラーダリーは 5 つの街区（Mohalla）に分かれており、800〜1,000 人が居住していると推測される（スィーカル市での調査、2018 年 12 月 27–29 日）。

[34] もう一つのカラーワントの家系である「シローヒー村のカルワー」の一族は、1980 年代までに音楽から貿易に転じて以降、音楽家を輩出しせずに現在に至っている（一族の末裔へのインタビュー、2018 年 12 月 28 日）。

[35] ナーガウル県 K 村の長老へのインタビュー（2017 年 12 月 25–27 日）。

びたいJBの若者たちの多くが彼の元に集まるようになった。その最も初期の弟子の1人が、世界的にも有名になったファイヤーズ・ハーン（Faiyaz Khan、1934−2014）である（巻末資料：**写真5**）。彼は、20代でデリーのAIR付き音楽家となり、のちにアメリカの大学やオランダのロッテルダム音楽院に定期的に招かれてタブラーを教えた[36]。彼の兄ムニール・ハーン（Munir Khan、1926−2011）は世襲楽器のサーランギーを継承し（巻末資料：**写真6**）、海外での演奏活動を精力的に行なった。

古典声楽家は、優秀な伴奏者、すなわちタブラー奏者とサーランギー奏者を常に必要としていることから、この兄弟は国内外での演奏会に招かれるようになったと考えられる。特に、オランダの大学や音楽専門学校に講師に招かれることが多く、ムニール・ハーンの息子は現地の女性と結婚してオランダに定住した。このような海外との関係は、1960年代後半から始まったもので、今日でもオランダを拠点として活動するゴーチャーの一族がいるのはそのためである。

3−2−2. カーワーの一族　フランス・コネクション

ラージャスターン州スィーカル県G村出身のカーワー一族の祖先は、代々サーランギー奏者の家系であった。G村で彼らは代々、チョウドリー（村長）の敬称で呼ばれる土地所有農民カーストのジャートをジャジマーンとして系譜管理を行う一方[37]、その地域の支配者であるラージプートの宮廷で音楽演奏を行ってきた。20世紀に入って、ハイダル・アリー・ハーン（Haider Ali Khan、1885−1945）は、ジャイプル藩王国の宮廷楽師からサーランギーで北インド古典音楽を学び、マウラー・バフシュの長女モーリーと結婚してジャイプルのN地区に住居を移した[38]。その息子が、バシール・アリー・ハーン（Basir Ali Khan、1917−1982）とアブドゥル・ガフール・カーワー（Abudul Gahul Kawa、1939−1998）である（巻末資料：**写真7**）。

この2人の兄弟は20歳以上年が離れており、その間には4人の姉妹がいた。そのうちの次女はゴーチャーのムニール・ハーンと結婚した。長男のバシール・アリーは先述のサーランギー奏者スルターン・ハーンの叔母と再婚した。また、次男のアブドゥル・ガフールはナーガウル県K村出身チュンカル一族の娘と、バシール・アリーの息子ユースフ・ハーンもチュンカル一族の娘と結婚した（巻末資料：**写真8**）。このようにJBを構成する中核一族は婚姻関係によって結びついていることがわかる。

アブドゥル・ガフール・カーワーとその息子・孫たち

兄のバシール・アリーは世襲楽器のサーランギーを父から継承したが、弟のアブドゥル・ガフールは幼少時の短期間ではあったが、母方の祖父マウラー・バフシュから声楽の基礎を

---

[36] ロッテルダム音楽院（Rotterdam Conservatory）で教えていたテッド・デヨング氏へのインタビュー（アムステルダムの自宅にて、2015年9月21日）。

[37] ジャートについてはBahadur［2011］などを参照のこと。

[38] ハイダル・アリー・ハーンの次男アブドゥル・ガフール・カーワーの妻へのインタビュー（2014年1月12日）。

学んだ。マウラー・バフシュが亡くなったあと、アブドゥルは姉の夫であるサーランギー奏者ムニール・ハーンの紹介で、古典声楽インドール・ガラーナーの巨匠アーミル・ハーン（Amir Khan、1912−1974）の弟子となった。その後、アブドゥル・ガフールはラージャスターンを離れデリーに移住して AIR 付き音楽家となったあと、1970 年に 1 年ほどオランダとアメリカに滞在してコンサートを行い、大学や音楽学校で音楽を教えた。その後は、1998 年に 60 歳で亡くなるまでたびたびオランダなどを訪れ、音楽活動を行なっていた。

彼は、パスポートの名前にハーンではなく、自分たちの祖先を示すゴート名を用いた最初の人物で、カーワー・サーハブ（KAWA *Sāhab*）と呼ばれ、JB の人々から尊敬されたという[39]。彼がカーワーというゴート名を用いるようになったのは、欧米の人間がラストネームに祖先からの家族名を用いているのを知り、カーストと結びつく名前の使用をやめたことによる。

彼は四男二女をもうけたが、息子たちはいずれもカーワーを名前に用いている。その長男はゴーチャーのファイヤーズ・ハーンの弟子となってタブラーを学び、父の海外演奏に同行して伴奏を務めるなどしていたが、父の死後はジャイプルの旧市街で楽器店を営んでいる。次男と三男はフランスを拠点としてシタールの演奏を行い、四男はタブラーを学んだ後にアメリカに渡った。特に三男のアマーナト・アリー・カーワー（Amanat Ali Kawa、1977−）は、ラージャスターン大学の大学院を修了した後に兄を頼ってフランスに渡り、現在ではパリを拠点にヨーロッパでコンサート活動を精力的に行い、またシタールも教えている（巻末資料：**写真 9**）。また、彼は兄の息子たちや姉の息子たちを定期的にフランスに招いてコンサートを開催している（巻末資料：**写真 10**）。

ハミード・ハーン・カーワーと「ムサーフィル」

アブドゥル・ガフール・カーワーの兄バシール・アリー・ハーンは、最初の妻（死別）との間にユースフ・ハーン（Yusuf Khan、1942−）、後妻との間に 4 人の男児をもうけた。アブドゥルは兄のバシールよりもその長男ユースフと年が近く、アブドゥルの妻とユースフの妻はナーガウル県 K 村のチュンカル一族出身の姉妹である。ユースフは、需要が少なくなっていた世襲の擦弦楽器サーランギーではなく打楽器タブラーを選び、遠縁にあたるゴーチャー一族のヒダーヤト・ハーンの最初の弟子となった。その縁から、アブドゥル・ガフールの長男と四男、そして次男の四男もまたヒダーヤト・ハーンの弟子となった。このように、JB の間にタブラーが浸透するようになったのは 1940 年代と考えられる。

ユースフの長男であるハミード・ハーン・カーワー（Hamid Khan Kawa、1964−)もまた父からタブラーを学んだ[40]。このように JB におけるタブラーの師弟関係や師匠を同じくする兄弟弟子の関係は複雑である。1984 年、彼はジャイプルでフランス人ギタリストと知り合い、その縁で初めてフランスを訪れる機会を得る。その後、彼はさまざまなジャンルの音楽家と共演したり、レコーディングしたりするようになり、ワールドミュージックの世界で少

---

[39] アマーナト・アリー・カーワー氏へのインタビュー（2013 年 2 月 5 日）。

[40] ハミード・ハーンがカーワーというゴート名を用いるようになったのは、アブドゥル・ガフール・カーワーの影響と考えられる。

しずつ知られるようになっていった[41]。その頃にハミードは、JB 出身者としては初めてフランス人女性と正式に結婚し、パリを拠点として音楽活動を行うようになる[42]。1995 年頃には自らがプロデューサーとなってラージャスターンの音楽芸能者であるランガーやマーンガニヤール、そして女性芸能者であるカールベーリヤーを加えた「ムサーフィル」や、親戚たちを参加させた「ジャイプル・カーワー・ブラスバンド」などの音楽グループを結成し、精力的に海外でのコンサート活動を行って行った。今日、フランスやベルギーを拠点として活動するビラーダリーの音楽家たちに、ハミードの父方の親戚であるカーワーの一族と母方の親戚であるチュンカルの一族が多いのはこのような理由による。

ムサーフィルの成功は、ハミードに続く次の世代にインド音楽を基調としたフュージョン音楽と、異なるカーストからなるグループ活動への志向を高めたと言っていいだろう。1980 年代後半以降に生まれたゴーチャーとカーワーなどの家族が中心となって、北インド古典音楽とラージャスターン民俗音楽、そして西洋を中心とする海外の音楽テイストを取り込んだフュージョンバンドを結成したり[43]、『インディアン・アイドル（Indian Idol）』や『インディアズ・ゴット・タレント（India's Got Talent）』のようなグローバル・フォーマットを有するオーディション・テレビ番組に個人あるいはグループとして出演したりして、プロデューサーなどとのネットワークを広げて今日に至っている。

このように、ラージャスターンの村落においてジャジマーンのために民俗歌謡や器楽演奏を行っていた優れた楽師のなかから、18 世紀から 19 世紀にかけて主に古典音楽の伴奏者として宮廷に採用される者たちが現れ、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて村落から都市に移動し、集住する者が増加するようになって行ったと考えられる。インド独立後は彼らのコミュニティのなかから、サーランギーやタブラーなどの器楽演奏によって国際的に注目される者や、古典声楽やシタールなどの主奏楽器に転じる者が現れ、海外との個人的ネットワークを広げて行った。そして、1980 年後半以降に生まれた若い世代を中心に、フュージョン音楽のグループ活動にも世界を広げている。彼らは変化の激しい近現代世界において、祖先から続く音楽伝統を遺産としつつ、音楽生活のための生き残りをかけた試みを続けていると言えるだろう。

このような音楽伝統の変化に対し、第 4 章と 5 章では、彼らの社会的レジリエンスの基盤となっていると考えられる JB の集団成員性と組織原理について検討する。

---

41 ハミード・ハーンとムサーフィルの活動、また、ラージャスターン音楽世界へのインパクトについては田森［2021a, 2021b］を参照。

42 ハミード・ハーンの長女は北インド古典声楽を学び、長男はタブラーに加えてヒューマンボイス・パーカッションを独学で学び、フランスを拠点として主にフュージョン音楽の演奏活動を行っている。本節の内容の多くは、ハミード・ハーン氏とその家族などへのインタビューに基づく（2013 年 1 月 9–10 日）。

43 「ジャイプル・ビート」や「デューンズ・オブ・ラージャスターン」などがその一例である。ただし、彼らのグループはその主導権などを巡って離合集散を繰り返しつつ今日に至っている。

4. ジャイプル・ビラーダリー（JB）の集団成員性と組織原理

ニューマンは、北西ラージャスターンの楽師コミュニティの社会組織は非常に複雑であるとしつつ、彼らの集団成員性とアイデンティティ形成には、(1) 父系出自の原理、(2) 婚姻関係の原理、(3) 村落群の原理が働いていることを指摘した。彼は、個人がどの集団に属すのか、あるいは婚姻後にどの集団に属すことになるのを決定するのが「父系出自の原理」と「婚姻関係の原理」であり、そのコミュニティの成員性は誕生・結婚・葬送に代表される人生儀礼への参加資格・義務によって確認されるとしている。その一方、「男性構成員は出身村落のみならず、「12」「24」「54」「72」のような数字によって示されるひとかたまりの村落群にも属しているが、その原理についてはほとんどわかっていない」という［Neuman 2010: 255］。本章では、「父系出自の原理」と「婚姻関係の原理」について、次章ではニューマンが未解明としている「村落群の原理」について JB の事例で明らかにしてみたい。

4-1. 父系出自の原理

ラージャスターンの音楽芸能カーストに共通する重要な組織原理の一つに、「父系出自の原理」がある。父親の出自を通して祖先に関係付けられる系譜的な識別は、カースト・アイデンティティの源泉の一つとなっており、ジャーティ（*jāti*）、カームプ（*khāmp*）、ナク（*nakh*）、そしてゴートのようなサブ・カーストを示す言葉で表現され、カースト内の外婚単位になっている場合も少なくない。地域やカーストによって用いられる言葉が異なる一方、同じ言葉でも意味合いが異なる場合がある [44]。

ニューマンが調査したジョードプルを中心とする北西ラージャスターンのダーディーが父系的帰属を表す言葉として用いるのはジャーティであるが [45]、JB においてはゴートあるいは稀ではあるがゴートラ（*gotra*）が用いられる。バラモンやラージプートなどのゴートラは伝説的聖仙（リシ）の名前に由来し、ゴートラが同じであれば祖先を同じくする父系血縁集団とみなされ、婚姻は禁忌となる。一方、ダーディー・ミーラスィーのそれぞれのゴート名が始祖あるいは中興の祖の名前なのかについては確定的ではない。なお、JB の年長者の多くは、6 代前までの直系祖先の名前を覚えており、本家と分家の関係を記憶している者もいる。ジャーティもゴートも家系の始祖あるいは中興の祖を表しているとすれば、その分布と系譜関係を明らかにすることにより、彼らと彼らのジャジマーンの移動の歴史をたどることができるかもしれない。

ラージャスターンにおけるダーディー・ミーラースィーのジャーティあるいはゴートは

---

[44] 西ラージャスターンにおいてカースト内のアイデンティティを表す際に用いられる用語の議論についてはニューマン［Newman, Chaudhuri and Kothari 2006: 167-168, 172, 175］を参照のこと。ニューマンによれば、ジャイサルメールのマーンガニヤールに、あなたのジャーティは何かと聞くとデーダラー（Dedhara）、どこのデーダラーかと聞くとジェーター（Jetha）というようにどんどん細分化されていく。また「ナクは何か」とたずねるとラージプートの氏族名などがあげられるという。

[45] 本稿では JB におけるインフォーマントの用語に従いゴートを用いているが、ニューマンはジャーティとして記述し［Neuman, Chaudhuri and Kothari 2006: 352-table. 34］、また他のカーストの場合はカームプ（*khāmp*）と記述されることもある。

数十以上あると推測されるが、JB で確認できる主なものはそのうちの 20 種類ほどである。それをニューマンの調査結果（ジャーティ・リスト）と対照させてみると、共通するゴートが多いことがわかる（**図表 2**、20 頁参照）。

ニューマンの調査でダーディーのジャーティとして提示された 36 種類と、JB の主なゴート 20 種のうち共通するのは 15 種。すなわち、JB のゴートの 75%がニューマンのリストと一致していることがわかる。その一方、N 地区にしか見られないゴートも 5 種ある[46]。そして、JB のゴートのうち、その家族人口や発言力などによって、中核となっているのは N 地区の A 街区と B 街区に主に居住するカーワー（*Kāwā*）、ケールワール（*Kherwāḍ*）、ゴーチャー（*Gochā*）、チュンカル（*Cuṇkar*）、ウッラー（*Urrā*）、チャーラン（*Cāraṇ*）、スィホール（*Sihol*）などの一族にほぼ限られ、彼らは婚姻サークルを形成している。

ニューマンの調査を含め、ゴートについてはその平等性について記述されているものがほとんどだが、JB では出身村落とゴートの結びつきに家格的な優劣が意識され、婚姻関係に重要な影響を及ぼしていると考えられるが、この問題については第 6 章で検討する。

4−2. 婚姻関係の原理

「父系出自の原理」に加え、彼らの社会組織を存続させ、その成員性とアイデンティティ形成の基盤となっているもう一つの原理が、「婚姻関係の原理」である[47]。出身地域を同じくするダーディー・ミーラースィー同士の結婚、すなわちカースト内婚が大原則である。

ただし、ミーラースィーを名乗るムスリムの音楽芸能カーストはダーディーだけではなく、マーンガニヤールやランガー、ドーリーなどがいる。このことは、既述のように、ミーラースィーが国勢調査では音楽芸能者のカテゴリーとして用いられる一方[48]、ラージャスターンの民俗音楽世界ではムスリム楽師への敬称として用いられてきたからである［Kothari 2001: 205］。

地理的分布や、音楽集団ごとに象徴的に用いられる楽器や音楽のレパートリーなどの違いを別とすれば、彼らを社会的に区別する特徴の一つは、ジャジマーンと呼ばれるかつて

---

[46] ジャイサルメール県を中心とするマーンガニヤールのジャーティと［Neuman, Chaudhuri and Kothari 2006: 342-345］、JB のミーラースィーのゴートには、バーバル（Babal）やカレート（Kalet）などのように共通するものが見られる。この点については別途検討が必要である。また、ラージャスターンにおいて人形劇を生業とし、バート（系譜語り・吟遊詩人）を自認するヒンドゥーのナト（Nat）のコミュニティについて調査したスノッドグラスによれば、彼らのコミュニティには 14 のゴートがあり、そのうちカーワー（Kava）、カレート（Kaleth）、ドークラーワル（Dokrawar）、そしてダオースィー（Daosi）の 4 つがムスリムのミーラースィーのゴートに由来し、ほかはヒンドゥーであるという［Snodgrass 2006: 144］。

[47] JB あるいは本稿で対象とするダーディー・ミーラースィーの婚姻形態は単婚制である。結婚相手は親が決めるものであり、村落においては十代半ばまでに、都市においては 20 歳頃までには婚約が行われるのが一般的である。結婚は家族同士の問題であり、一度婚出した娘は親元に戻れないのが原則である。そのため離婚は珍しく、寡婦婚も見られない。

[48] 1931 年のラージャスターンの国勢調査では、ミーラースィーを名乗る 17,051 人のうち、15,483 人がムスリムでその他がヒンドゥーと記述されている［Cole 1932: 163, table XVII］。そこにはダーディーだけではなく、マーンガニヤールやランガー、ドーリーなどが含まれると考えられる。

図表 2　北西ラージャスターンとジャイプルのジャーティ／ゴートの比較一覧

	北西ラージャスターン ダーディーのジャーティ名 *[1]（ニューマンらの調査）	ジャイプル N 地区 JB ミーラースィーの主なゴート名*[2]（田森の調査に基づく）	ジャイプル N 地区 JB 一族の出身県
1	Babar *[3]	バーバル *Bābar*	
2	Bagarwa	バーガルワー *Bāgaṛwā*	ナーガウル／スィーカル
3	Bavra		
4	Beru		
5	Chamga	チャマガー *Camagā*	
6	Charan	チャーラン *Cāraṇ*	スィーカル
7	Chhata		
8	Chunkar	チュンカル *Cuṇkar*	ナーガウル／スィーカル ／チュールー
9	Dagga		
10	Dhandhara		
11	Dhandhu		
12	Dhavsi	ダーウスィー *Ḍhāwsī*	スィーカル
13	Didan		
14	Duth		
(a)	**— *[4]**	**フォーガー *Fogā***	ナーガウル／スィーカル
15	Gari		
16	Gocha	ゴーチャー *Gochā*	スィーカル
17	Gorel		
19	Harlawa		
20	Juliya	ジューリヤー *Jūliyā*	スィーカル／チュールー
(b)		**ジュータク *Jhūṭak***	ナーガウル
21	Kalet		
22	Karal		
23	Kather	カーテール *Kāṭer*	ナーガウル／スィーカル
(c)	**—**	**カットゥ *Kaṭṭu***	スィーカル
(d)	**—**	**カルワー *Khalwā***	ナーガウル／スィーカル
24	Kawa	カーワー　*Kāwā*	ナーガウル／スィーカル
25	Kherwad	ケールワール *Kherwāḍ*	スィーカル
26	Khuriya	クリヤー *Khuriyā/Khoḍiyā*	ナーガウル／スィーカル
27	Kisora		
28	Mal		
29	Mothyan		
30	Mumiya		
31	Palna		
32	Pava		
(e)	**—**	**スィードワー *Sīdwā***	スィーカル
33	Sihol	スィホール *Sihol/Siyol*	ナーガウル／スィーカル
34	Sival		
35	Somti	ソームター *Somṭā*	ナーガウル／スィーカル
36	Urra	ウッラー *Urrā*	ナーガウル

*[1)] Neuman, Chaudhuri and Kothari［2006: 352（Table34: Dhadhi *Jati*）］より。

*[2)] ジャイプル N 地区における田森の調査（2012 年 1 月～2019 年 12 月）に基づく。

*[3)] 表中の網掛け部分はニューマンらと田森に共通するゴート。

*[4)] (a)～(e)の太字は、ニューマンらのリストには見られない JB に特有なゴート。

のパトロンの違いである[49]。ラージャスターンにおいて音楽芸能に関係するカーストの多くは、ジャジマーン一家の人生儀礼において音楽芸能を披露するだけでなく、彼らの系譜語りであったことが確認されている[50]。そのため、音楽芸能カーストのいる村落の分布はジャジマーンのそれと一致し[51]、その社会的地位はジャジマーンの社会的地位とパラレルな傾向にある。ラージャスターンにおける支配カーストの頂点にはラージプートがおり、村落において中心となるカーストはバラモンを除けば土地所有農民である。その他に、動産としての家畜を有する移動民や、職能カーストをジャジマーンとする音楽芸能カーストが多数ある[52]。

N 地区におけるミーラースィーの出自は、村落においてダーディーと自称あるいは他称されるカーストであり、彼らの村落におけるジャジマーンはジャート、都市宮廷におけるパトロンはラージプートであった。もちろん、このようなパトロンに関係づけられた社会的アイデンティティを有するダーディー・ミーラースィーのコミュニティは JB に限られるものではない。しかし、JB のメンバーが他州のダーディー・ミーラースィーと婚姻関係を結んだ事例や、同じラージャスターン州であっても遠く離れたジョードプル県の村落に暮らすダーディー・ミーラースィーと婚姻関係を結んだ事例はこれまで聞いたことがない。すなわち、カースト内婚の実情は、同様なカーストをジャジマーンとし、地理的な婚姻関係の外縁を有するコミュニティ内婚ということができる。

このようなカースト内婚・コミュニティ内婚の原則のもとで重要となるのが、「婚姻関係の原理」である。その原理は、複数のインフォーマントへのインタビューを元にまとめた以下のような言説に集約されるだろう。

> われわれは同じ村の者とは結婚しない。なぜなら、同じ村であるということは同じゴートであるということ。また異なる村同士であっても、ゴートが同じ場合は結婚しない。ゴートが同じということは同族ということになるので、血縁関係になくても結婚しない。また、母親の兄弟姉妹の娘（従兄弟）とは結婚しない。祖母の娘の娘であれば結婚できる。

すなわち、村落外婚、ゴート外婚、そして、「母方親族 4 親等内との婚姻禁忌」が明確に打ち出されている。まず、カースト内婚／コミュニティ内婚の原理の元で、今日の N 地区において実践されているのが同じ村落の出身者との婚姻禁忌である。村落に暮らすダーディー・ミーラースィーは基本的に一村に一家族であるため、同じ村落の出身者との婚姻は同じゴート（ゴートラ）の出身者との婚姻となる。そのため、村落外婚＝ゴート外婚が実践さ

---

[49] ジャジマーンおよび社会人類学におけるジャジマニ制の議論については鹿野［1977］を参照。

[50] ただし、筆者は今日のN地区においてかつてのパトロンの系譜語りができる者に出会ったことはない。都市で生まれ育った者は、系譜語りの職能とは切り離されており、今日でも村落に居住する長老たちの一部にその記憶が残されているのみである。

[51] ただし、ジャジマーンと系譜語りは同じ村落に暮らす場合と異なる村落に暮らす場合がある。後者の場合は、人生儀礼や必要に応じて系譜語りがジャジマーンの村落を訪れることになる。

[52] 例えばバート（Bhat）を自称し、ナトと呼ばれる人形使いのカーストはバンビーなどの皮革職人をジャジマーンとしてきたことが知られている［Snodgrass 2006］。

れることになる。JB のメンバーは自らの出身村落とゴートをアイデンティティの重要な構成要素として自覚していると同時に、他の構成員の出身村落とゴートについても認識しているのである。ゴートは父系祖先に関係付けられたものであり、その系譜に連なる家族・一族が離散しない限り村落におけるジャジマーンを世襲し、ジャジマーンの移動・分家に際しては自らの家族の中にも分家をつくって彼らと行動を共にしてきたと考えられる。異なる地域の村落に、同じゴートの家族＝分家がいるのはそのためで、その場合は村落が異なっていてもゴートが同じなので結婚はできない。年長者の中には 6 代前にまでさかのぼって、そのような分家の歴史を記憶している者がいる。しかし、ゴート外婚は近親婚を規制するというよりは、同族婚を規制するものと考えられる。

このように、同じコミュニティに属する家族の出身村落とゴートを記憶することで、適齢期の子供を持つ両親や祖父母は、結婚可能な家族とそうでない家族に分類することが可能になる。ただし、そのようなゴート外婚にも、ジャイプルのような大都市に暮らす JB には変化が見られる。同じような家格で、適齢期の婚約者が見つからない場合、父方 6 代内での系譜関係、母方 4 親等内での血縁関係になければ、同じゴートであっても出身村落によっては婚姻が考慮された事例がある。ただし、そうであったとしても、JB においては一部のイスラーム諸国や北インドのムスリムにおいて選好されるイトコ婚／近親婚が見られないことは特筆される。

すなわち、「サピンダ [53] ではない年下の女を娶ること（I-52）、始祖ゴートラを同じくするものから生まれたのでなく、母方系譜で五代、父方系譜で七代［の外にある］娘［を娶ること］（I-53）」［井狩・渡瀬 2002: 23］という、古代のヤージュニャヴァルキヤ法典における配偶者の選択規定に一致している。JB ではさらに、寡婦の再婚禁止や離婚の欠如、また若年婚などが見られ、ヒンドゥー社会における生活規範の共有が確認される。

4-3. 「自分たちとは異なるミーラースィー」について

JB の出身地域の調査から、JB は、スィーカル県、ナーガウル県とチュール一県の出身者によって構成され、ジャイプル県出身者はいないことが明らかになっている（**図表 2**）。

しかし、N 地区にはミーラースィーを名乗るジャイプル県出身の家族も少数派ながら暮らしている。しかし、JB のメンバーに彼らのことを聞くと、「自分たちとは別のミーラースィーである」という回答がなされ、明らかに別のコミュニティと認識されている。実際に、調査の及ぶ範囲では二つのコミュニティの間に婚姻関係はない。

祖先がジャイプル県出身であるという 1930 年代生まれの人物に彼らの出自や専門について話を聞いた [54]。

> 自分たちは、ジャイプルから 20 キロほどのところにある KL 村の出身である。その土地のタークルでジャジマーンであるラージプートに十代にわたり奉仕した。祖先はシェーナーイーなどの管楽器とナガラなどの打楽器が専門で、ナウバト（軍楽）を演奏し、

[53] サピンダは近親者を意味し、自分（男の場合）から見て母方の兄弟姉妹の娘とは結婚できない。
[54] ジャイプルでのインタビューに基づく（2018 年 12 月 25 日）。

戦では軍旗と並んで軍隊を先導した。しかし祖父の代には村での音楽演奏の仕事も次第に減ってブラスバンドを行うようになり、結婚式の演奏などでジャイプルに出てくるようになった。その構成は、5 人が最小単位で、管楽器と打楽器の編成だった。自分たちのゴートはマーンガーカー（*Māṇgākā*）、である。我々のゴートの数は 15 から 20 くらいで、ゴーリーケー（*Gorīke*）、ピラーンケー（*Pirānke*）、ローフターン（*Rohtāṇ*）、ディーダン（*Ḍīḍaṇ*）、ムミヤー（*Mumiyā*）、などがある。（中略）自分たちはミーラースィーであるが、かつてはヒンドゥーのダーディーであった。

このように、ラージプートをジャジマーンとし、管楽器と打楽器からなる軍楽を専門としていたことから、彼らはドーリーやダマーミー、ナガールチなど打楽器の名前に由来する楽師カーストと同様の職能を担っていたと考えられるが、彼らによればその起源はダーディーにあるという。確かにニューマンのダーディーのジャーティ・リストには、ディーダン、ムミヤーというダーディー・ミーラースィーと共通するゴートが含まれている（**図表 2**）。また、『アクバル会展』の宮廷楽師 36 人のなかに管楽器を演奏するダーディーというカテゴリーの軍楽演奏者も加えられていた［Allami 1994: vol.I, 682］。その一方、マーンガーカー、ゴーリーケー、ピラーンケーというゴートは、JB のゴートやニューマンが調査した北西ラージャスターンの楽師カーストのジャーティ・リストには見当たらない未知のものである。彼らはミーラースィーを名乗っているが、ラージャスターン地方の村落において一般的にドーリーと呼ばれた人々なのか、あるいはダーディーのなかでも管楽器や打楽器を演奏し、軍楽に携わっていた人々なのかという問題については別途調査が必要である [55]。

これらのことから、N 地区には JB のコミュニティとは婚姻関係を有しない異なるミーラースィーのコミュニティもあることがわかる。ジャイプル県の「KL 村のマーンガーカー」はジャイプル県のラージプートをジャジマーンとする村落出身のミーラースィーであり、スィーカル県とナーガウル県のジャートをジャジマーンとするミーラースィーとは異なる集団成員性とアイデンティティを有するコミュニティの一族といえよう。

5. ジャイプル・ビラーダリーの「親族・婚姻圏」と「村落群の原理」

5–1. ジャイプル・ビラーダリー（JB）と「村落地域圏」

本章では、JB の親族関係のネットワークによって形成される地理的範囲を「親族・婚姻圏」と呼んでその実態を明らかにし、さらにその内部の「村落群の原理」について探求してみたい。

これまでの調査から、JB を構成する人々の出身は以下の 3 県にまたがる 3 地域に限定され、その地理的範囲内で婚姻関係が結ばれていきたと考えられる。

---

[55] JB の親族・婚姻圏内では自らをラナ（Rana）と呼び、シェーナーイー（管楽器）とナガラ（打楽器）を専門にしてきた一族もいる。彼らによれば「ヒンドゥーのラナはドーリーで、（自分たち）ムスリムのラナはミーラースィーでゴートはチャーラン」という（スィーカル県 D 村の調査、2018 年 12 月 27 日）。

1）ナーガウル県東部
2）スィーカル県西部およびスィーカル市（旧スィーカル宮廷）
3）チュールー県南部

すなわち、互いに県境で接し合う 3 地域が JB の親族・婚姻圏と考えられるのである。そして、その内部には複数の村落から構成される村落群がいくつか存在する。この村落群の単位には、現地では「庭」や領域を意味するワーティー（*wāṭī*）が用いられる。JB の構成員は、自分が知らない村落名を聞いた際には、「どこのワーティーか？」と尋ね確認するのである。以後、本稿ではワーティーの邦訳に「村落地域圏」を用いる。また、例えばガウラーティー・ワーティー（*Gauḍātī/Gorati wāṭī*）であればガウラーティー圏と表記することにする。なお、現地ではパェーンティーサー（*Paintīsā*）にのみワーティーという表記が用いられないが、本稿ではパェーンティーサー圏として表記を統一する。

JBの親族・婚姻圏は、7つの村落地域圏から構成されている（**地図2、図表3**）。このうち、JBの構成員はパェーンティーサー圏、ガウラーティー圏（以上、ナーガウル県東部）、カンデーラー圏、チャンデーラー圏、ファテープル圏（以上、スィーカル県西部）の5圏の出身者（下線）が大部分であると推測される。

これらの村落地域圏の名前には由来がある。例えばガウラーティー圏は、英領インド帝国期以前にこの地域を支配した豪族のガウラー（*Gauḍā*）氏族の名前に由来すると考えられる。今日のナーガウル県のナーワー郡とほぼ重なるこの一帯は、デリー・スルターン朝前期まではラージプートのチャウハーン氏族が、その後のムガル帝国中期まではガウラー氏族が支配した［Jain 1972: 335-341］。そして、ムガル帝国後期にはカチワーハー氏族からジョードプル藩王国のラートール氏族の支配領域となってインド独立を迎えた。しかしながら、現在でもこの地域はガウラーティーと呼ばれているのである。

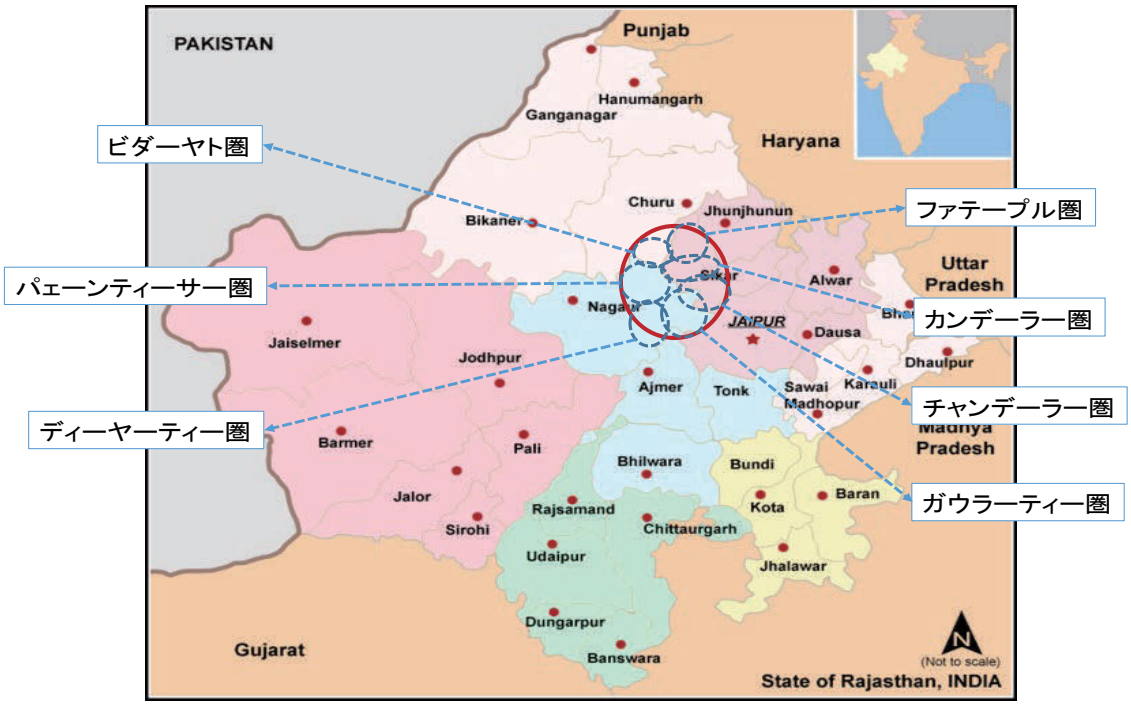
なお、地域名やかつての支配一族とは異なる名前で呼ばれる村落地域圏もある。本稿の事例で言えば、パェーンティーサーはヒンディー語で「35」を意味する言葉から派生したもので、地域圏を構成する村落数に由来している。また、ガウラーティー圏に属するクンカンワーリー村出身の著名なサーランギー奏者であったラムザン・ハーン（Ramzan Khan、1935–2015）の長男によれば、その村落数は「16」であったという[56]。16 村のうち 8 村のゴートがカーワーで、そのうちの 4 村がクンカンワーリー村からの分家であり、他の 3 村は同じカーワーでも系譜関係が明らかではない。

この事例のように、分家の発生と移動の大きな要因は、彼らのジャジマーンであるジャートが新たな土地に移住するにあたって、複数の職能カーストとともに行動をともにしたことによるものと考えられる。また、印パ分離・独立に際してのパキスタンへの移住や、ジャジマーニー関係の終焉により村落から出て行った家族もいる。

このように地域圏を構成する実際の村落数は増減し、人々の記憶に残された「象徴数」とは一致しないこともある。なお、ジャイプル県はドゥンダール圏、アジメールはカテーラー

[56] ジャイプルでのインタビュー（2014 年 12 月 31 日–2015 年 1 月 1 日）。

地図 2　ジャイプル・ビラーダリーの親族・婚姻圏を形成する、7 つの村落地域圏



地図出典：Wikimedia Commons
（https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Map_rajasthan_dist_7_div.png、最終閲覧日：2021 年 11 月 1 日）
（地図上への村落地域圏名、および図形・矢印の付加は田森による）

図表 3　JB の親族・婚姻圏を構成する村落地域圏一覧

	村落地域圏（*wāṭī*）	村落数*1	対応県名	対応郡名	支配氏族*2
1	パェーンティーサー	35	ナーガウル	デイードワーナー、ラドヌー	ラートール
2	ガウラーティー	16		ナーワー	
3	ディーヤーティー	52（54）		マクラーナー、パルバトサル	
4	チャンデーラー	8	スィーカル	スィーカル	シェーカーワト（カチワーハー）
5	カンデーラー	12		ダーンター・ラームガル	
6	ファテープル	32（33）		ファテープル、ラクシュマンガル	
7	ビダーヤト	12	チュールー	スジャーンガル	ラートール

*1）括弧内は異説
*2）藩王国時代の支配ラージプートの氏族名

圏のように、JB の親族・婚姻圏外に別の地域村落圏があることは知られているが、その実情について知る者は稀である。その理由は、それらの地域村落圏の人々とは婚姻関係にないために、情報が共有されていないことによるものと考えられる。

次節では、地域村落圏の事例としてナーガウル県のパェーンティーサー圏の地理的・歴史的背景と村落構成、そして具体的な事例として K 村を取り上げてみたい。

5–2. 地域村落圏の事例：パェーンティーサー圏と K 村

ナーガウル県は、ラージャスターンのほぼ中央に位置しており、東はスィーカル県とジャイプル県、西はジョードプル県、南はアジメール県、そして北はチュールー県などと接している。2011 年の国勢調査によればナーガウル県の人口は 3,307,743 人で[57]、10 郡から構成されている。

パェーンティーサー圏は、ナーガウル県の北東部に位置する現在のディードワーナー郡 189 村（人口 397,003 人）とラドヌー郡 99 村（人口 252,942 人）にほぼ重なる地域で、その名前は既述のように「35」という村落数に由来する。ダーディー・ミーラースィーが暮らしているのはディードワーナー郡 18 村、ラドヌー郡 13 村、ジャーヤル郡 3 村、マクラーナー郡 1 村であり（**図表 4**）、この地域の村落すべてに彼らが暮らしているのではなく、およそ八〜十村に一家族の割合であることがわかる。このうち、アケープラー村のみがマクラーナー郡に属する。マクラーナー郡はディーヤーティー圏に属するが、パェーンティーサー圏のデーウラーティ村から別れた分家であることから、そのような帰属になっている。また、ジャーヤル郡の 3 村のうち 2 村もパェーンティーサー圏からの分家である。

このように、本圏はディードワーナー郡とラドヌー郡の 2 郡から構成されていると考えてよい。このうち、K 村が含まれるディードワーナー郡の南東部はかつてサーンバル（Sambhar）とも呼ばれ、塩湖から得られる塩の利権が争われた。実際、このあたりの井戸から汲まれた水は塩っぽく、「しょっぱい水を飲み、バジュラ（雑穀）のチャパティを食べる」という言葉が土地柄をよく表している。

ナーガウルとその南部のアジメール（サーンバル）は、13 世紀ころまではラージプートのチャウハーン氏族とその支族が中心となって統治されていたが、デリー・スルターン朝時代にその勢力を失い、ムスリムの支配地となった。その後、ディードワーナーはメーワール地方のシソーディア氏族、マールワール地方のラートール氏族、さらにジャイプルを中心とするドゥンダール地方のカチワーハー氏族が加わってこの地方の覇権が争われたが、18 世紀後半までにラートール氏族の支配が確立していった［Jain 1972: 192-195］。K 村を含むこの一帯のタークル（領主）もラートールであった。

K 村は 3 千数百人ほどの村落である。住民の大多数はヒンドゥーで、ダーディー・ミーラースィーの一族だけがムスリムである。ヒンドゥー寺院はあるが、モスクはなく近隣からのアザーンも聞こえてこない。村は、かつての領主の邸宅と敷地を中心に広がっており（巻末資料：**写真 11**）、それぞれのカーストごとに集住している。

---

[57] 以後の人口データは 2011 年の国勢調査（https//www/census2011.co.in/district.php、最終閲覧日：2021 年 11 月 1 日）に基づく。

図表 4　パェーンティーサー圏の村落とゴート一覧（暫定*[1]）

	村名（gaon）	郡（tehsil）	ゴート（got/gotra）	村落人口*[2]
1	Akhepura	Makrana	ジュータク *Jhūṭak*	506
2	Arsinga	Jayal	バールワー *Bāwrā*	1,463
3	Bader	Ladnu	コーリヤー *Koliyā*	1,617
4	**Bankliya***[3]	Ladnu	**カルワー *Khalwā****[3]	2,923
5	**Basni** (Manda) *[3]	Didwana	**フォーガー *Fogā*** *[3]	1,826
6	Ber	Ladnu	コーリヤー *Koliyā*	1,050
7	Bhandari	Didwana	バーガルワー *Bāgaṛwā*	1,361
8	Bhidasari	Ladnu	チュンカル *Gorer*	2,098
9	Dabra	Didwana	スィホール *Sihol*	3,320
10	Datau	Ladnu	ゴーレール *Gorer*	1,818
11	Deorathi/Devrathi	Didwana	ジュータク *Jhūṭak*	1,561
12	Dhankoli	Didwana	カーワー *Kāwā*	7,626
13	Dikawa	Didwana	ガーリー *Gārī*	2,010
14	Dindarpura	Didwana	カーテール *Kāṭer*	2,205
15	Dolpura/Daulatpura	Didwana	バーガルワー *Bāgaṛwā*	4,748
16	Fogari/Phogri	Didwana	ガーリー *Gārī*	2,734
17	**Gorau***[3]	Jayal	**フォーガー *Fogā*** *[3]	4,159
18	Ghildoda Khara	Ladnu	スィホール *Sihol*	1,671
19	Jochana/Jochīna	Jayal	チュンカル *Cuṇkar*	1,454
20	Kalwani	Didwana	ムミヤー *Mumiyā*	1,279
21	**K 村***[3]	Didwana	**チュンカル *Cuṇkar****[3]	3,366
22	Khakoli	Didwana	ガーリー *Gārī*	3,423
23	Khudi/Khuri	Didwana	ソームター *Somṭā*	1,102
24	**Kodiya***[3]	Didwana	**バーバル *Bābar****[3]	6,488
25	Mamroda	Didwana	チャーラン *Cāraṇ*	1,874
26	Mithri	Ladnu	フォーガー *Fogā*	3,906
27	Molasar	Didwana	ポスラー *Posla*	6,920
28	Moriyawat	Didwana	ガーリー *Gārī*	1,788
29	**Ratau***[3]	Ladnu	**バーガルワー *Bāgaṛwā****[3]	7,194
30	Rodu/Rodoo	Ladnu	カルワー *Khalwā*	6,223
31	Sandas	Ladnu	フォーガー *Fogā*	1,917
32	Sanwrad	Ladnu	チュンカル *Cuṇkar*	1,438
33	Silanwad	Ladnu	ダーンダラー *Dhāndhaṛā*	4,435
34	Sinwa/Seenwa	Ladnu	ゴーレール *Gorer*	3,170
35	Soupka/Soopka	Didwana	バーガルワー *Bāgaṛwā*	3,737

*1）本一覧表は 2019 年 12 月までの調査に基づく暫定的なもので、今後修正の可能性がある。

*2）村落人口の詳細は 2011 年の国勢調査データ（https://www.census2011.co.in/district.php、最終閲覧日：2021 年 11 月 1 日）より。

*3）太字はかつてのサルパンチの村落とそのゴート。

このK村のダーディー・ミーラースィーのゴートはチュンカル。代々、土地所有耕作農民であるジャートのチョウドリー（村長）をジャジマーンとし、K村を含む一帯を支配するラートール・ラージプートの領主に仕えて来た。彼らはラージプートの邸宅とジャートの居住地に挟まれた緩い勾配の斜面に居を構えて暮らし（巻末資料：**写真 12**）、高台側に建てられた建物の階上からは村のほぼ全体を見渡すことができる（巻末資料：**写真 13**）。この土地は、メームダジー（Memdaji、1898−1958）と呼ばれる先代の時代に領主から与えられたものである。

メームダジーはこの地に定着した五代目で、四男六女をもうけた。現在、長男、三男、四男の3家族が同じ敷地で暮らし、次男の家族はK村内に別の土地を得て暮らしている。長男から三男まではすでに亡くなっており、現在のチュンカル家の家長は1946年生まれの四男ナースィル・ハーン（Nasir Khan、以後ナースィルジー）である（巻末資料：**写真 14**）。以下は、ナースィルジーが語った村の歴史を要約したものである。なお、本稿におけるパェーンティーサー圏およびK村の歴史等に関する情報の多くは、特段の注釈を入れない限り、ナースィルジーから提供されたものである[58]。

5−3. K村の歴史と口頭伝承

先述のように、村落の歴史は移動の歴史から始まる。K村がいつ頃から存在し、彼らがいつ頃この地にやってきたか、その正確な年代は不明である。ナースィルジーが記憶している自分たちの祖先名は6代前までであるが[59]、ダーカー（*Ḍhākā*）をゴートラとするかつてのジャジマーンであるジャートの祖先名は十数代前まで記憶し、その名前を吟唱することができる。その伝承によれば、彼らの系譜はジューリヤー（*Jūliyā*）という人物から始まる。ムガル帝国の時代に大きな戦争があり、駆り出された男たちは全員死んだが、たまたま生家に帰省していた母親とそのお腹にいた男児ジューリヤー・ダーカーだけが生き残った。スィーカル県にはその男児の名前に由来するジュリヤーサルという村落が今もあり、そこから周辺のナーガウル県やチュールー県に別れて移動していったもので、K村にやってきたジャートもその子孫であると考えられる。すなわち、ラージャスターンの各村に居住するダーディー・ミーラースィーのチュンカルの一族は、代々ジャートのダーカーの一族をジャジマーンとする系譜語りであり、ジャジマーンの移動あるいは要請によって分家を生じさせ分散していったのではないかと推測される。

そのジャートに率いられて、現在のK村あたりにやって来たのはバラモンを含む9つの

---

[58] K村および移動先でのインタビューに基づく（2015年12月25−27日、2016年12月27日、2017年12月25−28日）。

[59] ダーディーはジャートの系譜語り・吟遊詩人であったが、彼らをジャジマーンとして系譜管理と詩作を行うガダーマンガー（*gaḍhāmāngā*/*gaḍhāmūngā*）という別のカーストがある。彼らは他県に居住しており、パェーンティーサー圏のダーディーの家系を十数代に渡って記憶／記録し、また英雄的な人物の詩作（ドーハー）を行い、結婚式にやって来て披露していたという。ラージプートをジャジマーンとするチャーラン（Charan）という系譜語り・吟遊詩人のカーストがあるが、さらにチャーランをジャジマーンとするモーティサル（Motisar）というカーストも知られている［Gahlot, Singh and Dhar 1989: 130; Singh 1990: 121-122］。このような、別のカーストに自分たちの系譜と血統、すなわち社会歴史的アイデンティティを求めるシステムがラージャスターンにはみられる。これらのシステムについては別の機会に探求してみたい。

カーストで、そのカーストを知る者こそがオリジナルの村人であるという。その後、村は何回か火災にあって全焼し、そのたびに少しずつ移動した。昔の家は藁葺きで、暖房と言えば雑木と牛糞を燃料とするほかなく、風の強い日はその火が飛び散って延焼・全焼した。現在のタークルの敷地に隣接した土地を得てレンガの家になったのは、ナースィルジーの父メームダジーの時代で、今から約 100 年前のことである。

その時の逸話が残っている。メームダジーの父親（1880−1902）は、彼が 4 歳のころに亡くなってしまった。そのため、生活が困難になった母親は自分の出身村である A 村にメームダジーを連れて帰り育てることをタークルに申し出た。タークルは、K 村からダーディー・ミーラースィーの伝統がなくなることを憂い、A 村で修行を積んだあとに戻って来れば、自分の敷地内に住む場所を与え、村の近隣に農業ができる土地を分け与えることを約束してくれたという。メームダジーは母方の叔父から主に音楽を学んだが、その叔父はメームダジーの父親とともにマウラー・バフシュから古典音楽の基礎を学んだ人物であった。このようなつながりから、K 村のチュンカル家は JB とのつながりを持つようになったと考えられる。すなわち、五女はマウラー・バフシュの娘の次男アブドゥル・ガフール・カーワーに、六女はユースフ・ハーン（カーワー）に嫁いだ。そして、その縁もあってメームダジーの三男の 2 人の息子はベルギーで暮らし、家長（四男）のナーシルジーの 4 人の息子のうち 3 人はパリを中心に暮らしている。そのようなことから、K 村に残って生活しているのは老人と婦人、子供たちがほとんどである。

ちなみに、K 村のオリジナルのカーストは、ダーディー・ミーラースィー以外はすべてヒンドゥーである。なぜ彼らだけがムスリムなのか、その理由については明確ではない。しかし、村落に暮らす者たちは、自分たちのルーツがヒンドゥーのダーディーにあることを認めており、イスラームへの改宗をアウラングゼーブの時代と考える者もいる[60]。「われわれはムスリムで、割礼を行い、土葬するが、その他の生活習慣はヒンドゥーと似ている[61]。（中略）われわれはヒンドゥー寺院で夜通し宗教歌謡を歌い続けるジャーグラン（*Jāgran*）のスペシャリストだった[62]」とナースィルジーはいう。ジャイプルなどの都市部では、定時に礼拝を行うミーラースィーも増えているが、村落部におけるダーディー・ミーラースィー、特にモスクのない村落での生活慣習は両儀的である。K 村のチュンカル家の部屋の入り口に

---

60 コーターリーは、シンド地方やジャイサルメールに居住するスィンディー・シパーヒーをジャジマーンとするランガーがヒンドゥーからムスリムに改宗したのは、アウラングゼーブの時代と推測している［Kothari 1972: 5］。また、1891 年のマールワール地方の国勢調査に基づく民族誌によれば、ドーリーにムスリムとヒンドゥーの両方がいるのは、その地方一体がムガル帝国の属州になった際に、アウラングゼーブに命じられてイスラームに改宗した者たちと難を逃れてヒンドゥーに留まった者たちがいたことによるという［Neuman, Chaudhuri and Kothari 2006: 263-264, Singh 1990: 135-137］。クローはアウラングゼーブの時代に多数の改宗者が生まれたのはジズヤの復活によるものであるとし、それによって改宗したのは褒美を目的とした下層民としているが［クロー 2001: 236］、なぜ改宗者に音楽芸能者が多いのかは不明である。

61 クローはインド・ムスリムの生活習慣について「イスラーム教徒の大多数がヒンドゥー教徒からの改宗者であったので、当然のこととして、彼らには古来の習慣が深く染みついていた。イスラーム教への改宗が多少とも表面的なものに過ぎなかった地方においては、ヒンドゥー教の慣習や伝統が広く生きつづけた。」［クロー 2001： 321］としている。

62 ジャーグランは、ヒンドゥーの女神や英雄神・民俗神に対して捧げられる宗教歌謡の一種。

は、イスラーム聖地の装飾タイルが飾られる一方、部屋の奥にはクリシュナ神とラーム・ピール（ラーム・デーヴ）の絵画が飾られ、香が焚かれていた（巻末資料：**写真 15**）。

繰り返しになるが、彼らのジャジマーンはジャートであり、ラージプートに奉仕してきた。ジャートの系譜・歴史を語り、ラージプートの宮廷でマーンドを歌い、ヒンドゥー寺院でバジャンなどの宗教歌を歌い、才能のある者・名声が広まった者はシェーカーワーティー（スィーカル）の宮廷やジャイプルのグニージャン・ハーナーの楽師に採用されたのはそのような宗教的両犠性と無関係ではないと考えられる。

5-4. 政治的単位としての村落地域圏と婚姻サークル

本章の最後に村落地域圏の政治的機能と婚姻関係について検討してみたい。

ナースィルジーによれば、それぞれの村落地域圏（ワーティー）にはパンチャーヤットがあり、サルパンチ（*sarpanch*）がいた。パンチャーヤットは 5 人の年長者からなる伝統的な自治組織であり、サルパンチは 5 人の長老／代表者を意味する。すなわち、地理的外縁を有する村落群としてのワーティーはカースト・パンチャーヤットの地域単位に相当し、村落から選出された 5 人あるいはそれ以上の代表によって運営される意思決定機関であったと考えられる。その機能は、彼らの社会生活にかかわる種々の決定を行うほか、問題や紛争の解決のための司法的機能を有していた。このシステムは藩王制が完全に廃止され、ジャジマーンとの関係が弱体化する 1970 年代頃まで機能していたと推測される。

パェーンティーサー圏のゴート別の村落数およびかつてのサルパンチ輩出村の関係をまとめたものが（**図表 5**）である。

図表 5　パェーンティーサー圏のゴート別村落数とサルパンチ

ゴート	村落数	サルパンチ輩出村（○印）	
ガーリー	4		
バーガルワー	4	○	R 村
フォーガー	4	○	Bs 村 G 村
チュンカル	3	○	K 村
カルワー	2	○	Bn 村
ゴーレール	3		
ジュータク	2	○	D 村／A 村
スィホール	2		
コーディヤー	2		
バーバル	1	○	Ko 村
その他（単村）	8		
総数	35		

サルパンチのゴート（図表 5 の○印）は、「R 村のバーガルワー」「Bs 村と G 村のフォーガー」「Bn 村のカルワー」「D 村と A 村のジュータク」「Ko 村のバーバル」そして「K 村のチュンカル」の 6 つであった。この村落地域圏の場合は、村落数の多いゴートからサルパンチが選出される傾向にあったことがわかる。複数の村落に同じゴートが見られる場合は、本家と分家の関係にあることも少なくない。

このような同じ系譜関係にある村落が複数ある場合は、本家からサルパンチが選出される可能性が高い。また、同じゴートの異なる村落から 2 名が選ばれ、それが 1 名と勘定される場合もあった。今日では、村落地域圏のパンチャーヤットが開催されることはまずない。かつての有力者の葬儀の節目に行われる会合にその面影をみるのみである（巻末資料：**写真 16**）。

K 村のメームダジーおよびその父と祖父、またナースィルジーを含む 4 人の息子はいずれもパェーンティーサー圏の村落から妻を娶っているが、彼らの妻のゴートはバーガルワー、フォーガー、ジュータク、カルワーなどいくつかの村落に限定されている。すなわち、パェーンティーサー圏のサルパンチであった K 村は、やはりサルパンチを輩出する他の村落＝ゴートから妻を娶る傾向にあったことがわかる。このように、伝統的生業を同じくするカーストの村落地域圏においても、階層的な婚姻サークルが形成されていたと考えられる。

一方、6 人の娘のうち、3 人はパェーンティーサー圏ではなく、スィーカル県のチャンデーラー圏の村落出身で JB の有力構成員となっている一族に嫁いだ。すなわち、三女は Dd 村のケールワールの一族に、そして既述のように五女と六女は G 村のカーワーの一族に嫁いだ。このように、インド独立以後は、JB を媒介にして異なる村落地域圏間での婚姻関係がより促進されていったものの、各村落地域圏にみられる階層的な婚姻関係の連鎖は他の地域圏や都市のビラーダリーにも延長されていったと考えられる。

ニューマンや英領インド帝国期の国勢調査に基づく民族誌においては、ダーディーのジャーティ／ゴート間での平等性について言及される場合が多いが、次章ではそのような記述とは異なる JB での実態について探求してみたい。

6. 社会規範と行動原理：スパーティークとウパーティーク

6-1. JB におけるもう一つの組織原理：「村落間格差と婚姻関係」

JB における村落地域圏の村落構成や婚姻関係の聞き取り調査において頻繁に用いられる言葉・概念にスパーティーク（*supātīk*、以後スパーと省略）とウパーティーク（*upātīk*、以後ウパーと省略）がある。

ある者は「それは家柄・家格のようなもので、われわれのカーストにかつてあり、今でもあるもの。そしてそれは、出身村落、出身ゴート、祖先や両親の評判などによって決まるもの」とする[63]。また、ある者は「スパーやウパーというものが顔に書いてあるわけではない。よい行いをする者がスパーで、よくない行いをする者がウパーなのだ。例えば、自分や自分たちのことを偉く見せようと威張る者はウパーである。ビラーダリーの約束事に従わなかったり、会合や葬儀に来なかったりする者もそうだ」と指摘する[64]。

このように、スパーは「優れた家族」と「優れた行為」のいずれか、あるいは両方に用いられることがあり、ウパーはその逆である。優れた家族とはビラーダリーの結束と社会的地

[63] 現地調査より（2015 年 2 月 11 日）。以後、同様の表記とし、インフォーマントは匿名とする。
[64] 現地調査より（2015 年 2 月 12 日）

位の維持・向上に貢献してきた家柄を意味し、個人としては伝統的規範の体現者であることが求められるのである。しかし、「優れた家族（家格の問題）」と「優れた行為（個人の問題）」との関係はどのようになっているのだろうか。祖先の出身村落地域圏が異なる 2 人の構成員の言説を取り上げてみたい。まず、スィーカル県のチャンデーラー圏を故地とする 1970 年代後半生まれの人物の声である [65]。

> それは個人の行いに用いられることもあるが、主に家族単位に用いられる。骨や血として受け継がれたものだ。スパーな家族はスパーな村落から嫁をもらい、スパーな家族に嫁に出す。それぞれの村落のダーディーは代々同じゴートなので、出身村落の名前が家族の名声と結びついている。だから、同じゴートであっても出身村落が異なれば別の家族とみなされる。例えば、G 村の K ゴートはスパーだが、M 村の K ゴートはウパーとされているように。

すなわち、それは血統の問題であり、村落ごとにスパーとウパーに分類され階層化されているのである。次に、祖先がナーガウル県のガウラーティー圏出身の 1980 年代前半生まれの人物の声を取り上げる [66]。

> ミーラースィーの地位は、①出身村落の優劣（家格）、②音楽での名声、③パーソナリティの 3 つで決まる。家柄がよいからといって音楽が優れている訳ではないが、音楽が優れているからといって家格が上昇するわけではない。よい家柄で、パーソナリティのよい人、すなわち、ビラーダリーのためにお金を使ったり、仕事を世話したりするなどして貢献する人が尊敬される。ウパーな家族の出身者がいくらお金を使っても「彼はウパーだから、すなわち、スパーと見られたいからそうするのだ」と思われる。

この人物はビラーダリー内での地位に関係する 3 つの要素を挙げているが、やはりその中でも家格あるいは血統を重視していることがわかる。JB 構成員の多くが、音楽という自分たちの世襲職業で身を立てたいと考えているものの、その機会をつかめずに、あるいは経済的理由から諦めた者たちもいる。しかし、生業を変えたとしても、彼らの家格が変動するわけではない。スパーとウパーという言葉が村落名と結びついて表現される場合、それは変えようのない家格差あるいは分類概念として用いられる。そして、このような家格の分類は婚姻関係に重要な影響を与える [67]。

> 自分たちの習慣として、よい村落の出身家族に娘を嫁がせようとする。しかし、ウパーな家族がスパーな家族に娘を嫁がせようとすれば、通常のダウリーの他に“リート（*reet*）”と呼ばれる裏のお金を支払うことになる。婚姻関係を結んだ家族はリシュテーダーリー

---

[65] 現地調査より（2016 年 9 月 9 日）。
[66] 現地調査より（2014 日 12 月 30 日）。
[67] 現地調査より（2014 年 12 月 30 日）。

（*riśtedārī*、親戚）と呼ばれるが、よい家族に娘を嫁がせたからといってその地位が変わるわけではない。一緒に食事ができるようになるだけだ。

あるインフォーマントが書いたスパーの家族とウパーの家族の代表的な村落名リストがある[68]。そのリストを見たある人物は、「ここにウパーと書かれた人たちはどのように思うのか。その村の出身者に出会ったら、どんな態度をとるのか」と言いつつ、リストを見ながら考え込んだ上で、自分たちの親戚のなかにウパーな家族がいないことを確認し納得した[69]。また、ある人物は「スパーの者は自分たちのことを誇るけど、自分たちがウパーであると言う者は誰もいない」と笑いつつ、「ウパーは自分の娘を常にスパーな家族に嫁がせようとすることは間違いない」という[70]。スパーな家族はスパーな家族に娘を嫁がせ、スパーな家族から嫁をもらいたいのはもちろん、ウパーな家族もスパーな家族に嫁がせたい。しかし、スパーな家族はウパーな家族とリシュテダーリーにはなりたくない。そこに、近年では経済的な問題が入ってくるようになった。以下は、ある家族間の婚姻に関連して実際にあったという逸話の概略である[71]。

ビラーダリーのある著名な音楽家 H 氏の親族の結婚式にある男性たちがやってきた。それは M 村の K 一家であった。H 氏は出席者の面前で、ここはお前たちがくる場所でないと追い返そうとした。しかし、彼らが来たわけがあった。H 氏の叔父の孫に縁談がもちあがった。相手は、金持ちの M 村の K 一家だった。その娘の父親と祖父は、通常の何倍ものダウリーに加え家と車を「リート」として用意し、婚約を取り付けていた。H 氏はそのことを知り、一族にウパーな者が入って来たことを恥じ、その結婚式には行かなかった。その縁談を進めた者は、親戚やビラーダリーに顔向けができず、そのプレッシャーに絶えきれなくなったのか間もなく心臓病で亡くなった。

このようにウパーな家族に押された烙印＝スティグマは、経済的な成長や新たな婚姻関係によっても容易に解消できないと認識されている。そしてそれは、「かつてのものだが、今も残っているもの」である。しかし、なぜ彼らがウパーとされてきたのか、その具体的な原因や烙印を押された時代については明確ではない。そのような格付けのみが継承され、その原因について知る者がいないのか、知っている者がいたとしてもそれを口にしないのかも明らかではない。一般的には、「金のあることを見せびらかしたり、名声のある者をおとしめたり、カーストの規範・慣行に反したり、カースト全体を辱めるような行いをした家族」という事になる[72]。一方、スパーでいるためには威信（*izzat*）を重んじ、「正しい行いをすること」というのがその回答ということができるだろう[73]。

---

[68] インフォーマントによる手書きリスト（2014 年 12 月 29 日作成）。
[69] 現地調査より（2015 年 2 月 11 日）。
[70] 現地調査より（2015 年 2 月 11 日）。
[71] 現地調査より（2017 年 8 月 19 日）。
[72] 現地調査（2016 年 9 月 9 日）など。
[73] 現地調査（2016 年 9 月 14 日）など。

このような階層的な言葉を用いるのは、「ダーディー・ミーラースィーだけ」と答える者もいれば[74]、年長者の中には「スパーとウパーという区別はラージプートに由来する。彼らのなかにも同様な区別があった」とする者もいる[75]。深沢は、プーナの織物カーストが血統の優劣によって「良い血統の織師」と「婢の血統の者」に分裂し、その一部の家族間での婚姻・交際がカースト内での大きな問題となっていたことを明らかにしたが［深沢 1972: 159-162］、その記述はダーディー・ミーラースィーのスパーとウパーの分離を想起させる。また、カースト内の分裂・分派の契機として、①社会習慣の変更、②血統の優劣、③職業の転換、④特定の宗派への参加など多様な事情が挙げられ、一部の成員との婚姻が禁忌となる原因の一つに、その家族が伝統に反する行為を実施した場合について言及している。BJ の場合も、そのような事情が含まれていたと考えられる。

ただし、ある村落の長老によれば、スパーとウパーという家格あるいは血統に関する分類を認めつつも、すべての村落がスパーかウパーに明確に分類されるわけではないことも指摘している。すなわち、そのどちらにも明確にされていない村落が存在することには留意が必要であろう[76]。

6–2. 社会規範からの逸脱：ウパーティークな振る舞い

前節ではスパーとウパーという区別が血統あるいは家格によるもので、出身村落名によって表徴されることを明らかにした。他方、ウパーという言葉は、ある家族の振る舞いや、個人の社会的行為を批判する際に比喩的に用いられる場合もある。本節では、ウパーな行為に関する構成員たちの談話を紹介しつつ[77]、JB の伝統的慣習/社会規範と行動原理について考察してみたい。

> **談話 A**：われわれのビラーダリーから初めて州政府の政治家になった A の妻は、50 歳過ぎたころから、一般の人々の前でも歌手として歌うようになった。ビラーダリーの者も今や何も言わない。しかし、女性が一般の前で歌うのを家族が許したとしても、ビラーダリーにとっては汚点となる。なぜなら、1 人が許されれば、それが前例となって広がっていく可能性があるからだ。

JB の社会規範には、女性に関するものが少なくない。その一つが、自分たちのカーストから女性芸能者を輩出しないことである。それは、英領インド帝国期の国勢調査や民族誌において女性芸能者が売春と結びつけられ、その伴奏を行う者たちが売春の幇助者と見なされたことと無関係ではない。結婚式などの女性部屋で、女性達だけで歌ったり、楽器演奏したりするのは別だが、男性を含む一般大衆の前で音楽を披露しないことが不文律となって

---

[74] 現地調査より（2016 年 9 月 14 日）。
[75] 現地調査より（2016 年 12 月 24 日）。
[76] B およびその親族・婚姻圏において、スパーとウパーとその中間という三層構造になっているのか、ウパーでない家族は全てスパーなのかという問題については更に調査の必要がある。
[77] 以後、インフォーマントはいずれも匿名とし、インタビュー日時・場所も明らかにしないことにする。

きた。そのため、いかに優れた音楽的才能の女性がいたとしても人前に立つことはできなかったのである。談話 A は、そのような彼らの慣行を破った事例として捉えられる。この事例の場合は既婚女性で子供たちも成人しており、パリなどでコンサートを行った実績もある。彼女の家族によれば、夫や息子たちが彼女の才能を認め意思を確認したことで音楽活動が可能になったという。しかし、ビラーダリーの中には、それが可能となったのは夫が政治家であり、女性の音楽活動がウパーな行為であると考える者もまだいるということである。

> **談話 B** : 経済的にも成功している B は、ジャイプルの妻のもとにはほとんど戻らず、家への仕送りも母親にしかしない。妻は、お金をもらうにはその母親に頼まざるをえず、その母親や娘たちからハラスメントを受けたという。そして、その妻が警察に駆け込んだため、事が公になった。そのような家族の醜態を晒す者はウパーと呼ばれる。

婚姻とその後の結婚生活は本人たちの問題から、家族・親族そしてビラーダリーの問題になっていく場合がある。JB は祖先との関係あるいは婚姻による関係によってどこかで結びついている小さな世界である。かつては、宮廷以外の音楽活動の多くは花街と結びついていた。女性芸能者に音楽を教え、その伴奏を務めることで生活の糧を得ていた楽師もいた。そのような楽師の中には遊郭に入り浸りとなり、家庭に戻らず、お金も入れない者もいた。そのような者の妻もまた非難され、家族だけでなく親戚も巻き込んだ問題となった。そして、それは時にはビラーダリーの問題となり、不名誉な記憶として受け継がれていく。談話 B の事例は今日の問題であり、かつてのような遊郭がらみの問題ではないものの、夫が妻をないがしろにし続けたウパーな行為の結果が、警察がらみの公の問題になったという点で、ビラーダリーの不祥事として認識されたということである。

> **談話 C** : 音楽家として名声の高かった C は、結婚してから何年たっても子宝に恵まれなかった。そのため 2 人目の妻をもらった。最初の妻が生きているのに、2 人目の妻をもらう習慣はわれわれにはない。たとえ、1 人目の妻が承諾したとしても。2 人目の妻として来てくれる者も少なく、結局ウパーな家族から嫁をもらった。

JB の婚姻形態は一夫一婦制である。男性の場合は妻と死別した場合に再婚するケースが多い。死別により、3 人目の妻を迎えた例もある。一方、彼らのビラーダリーで離婚が認められて来なかったのは、寡婦婚の禁忌と関係していると考えられる。離婚後に男性は再婚できるが、女性は再婚できずに元の家に戻ることも困難であることから、女性を守る意味合いがある。そのような婚姻慣習もあり、談話 C の場合は、子供のできない最初の妻が夫の二人目の妻を自ら認めたということであろう。しかし、このような婚姻慣習からの逸脱は、家族の問題だけでなく、ビラーダリーの問題へと拡大される。自分たちの婚姻サークルに、異なる「血統」が入って来ることが、ウパーな行為として認識されるのである。

談話 D：外国人との間で結婚と離婚を繰り返したり、異なるカーストの妻をもらったり、複数の女性と結婚する者がいる。そのような行為は子供たちに影響する。子供にとって両親は手本で、その面倒を見るのはもっぱら母親だ。だからビラーダリーの慣習に反した結婚をするのは親のせいと考えられてしまう。外国人や異なるカーストの女性と結婚した場合、ビラーダリーの伝統に沿った婚姻儀礼は行えない。このような行為が重なるとウパーと言われてしまう。

ここで問題とされているのは、外国人や異なるカーストとの結婚と離婚、複数の女性との婚姻関係である。JB の場合、20 歳頃までに婚約者が決められることが多い。その後に海外に行って、外国人と結婚するケースが 1990 年以降に見られるようになっている。また、外国人との結婚と生活が、海外で完結される場合は大目に見られる傾向にあるが、インド国内での異なるカーストとの結婚の場合は問題が異なる次元になる。これらは、異なるカーストのパフォーマーを含むグループ公演が海外で多くなり、カールベーリヤーのような女性芸能者との接触が増えた 2000 年以降に特有な現象と言えるだろう。サルパンチが機能していた時代であれば、ビラーダリーとしての話し合いの議案になっていたとも想像される。

これらの談話に表れる事例は、自分たちのカースト／コミュニティに外国人や異なるカーストの血、また家格の異なる一族の血が入り込むことへの規制、すなわち婚姻に関する慣行や女性の扱いに関する規範・慣習として社会的レジリエンスの重要な部分を担っているものと考えられる。他にも、葬儀の際に、法外な大金をかけて食事を振る舞うなどの行為も、それを行った家族によってはウパーな行為とされることもある。スパーであるためには、自分たちのコミュニティのためになることを常に行い、正しいやり方で儀礼を行い、自分の家族から道徳的規範に反する者＝不祥事を起こすものを出さないことが大切とされるのである。JB の誰もがコミュニティ内で尊敬されスパーでありたいと望んでいるが、それは経済的な余力とも関係している。しかし、経済力があればいいというのではなく、使い方が大切とされる。そして、ウパーの者がいくらコミュニティの人々に大盤振る舞いをしても、それはウパーだからと言われてしまうのである。

JB において尊敬されるには、リーダーシップと社会規範の守護者としての役割の両方が求められる。伝統的なリーダーシップが主に社会的資源に依存していたのに対し、今日の個人的リーダーシップは経済的資源により多く依存するようになっており、海外での音楽活動がそれを支えている場合が少なくない。それに対し、国内外での音楽活動の機会に恵まれない構成員の中には、そのような個人的リーダーシップを必ずしも快く思わない人たちもいる。その根底には、社会経済的な成功者のみが語りの機会を創出し、時には社会規範からの逸脱も見逃されていることなどへの憤りがあると考えられる。

今日、JB においてもその親族・婚姻圏においても、かつてのサルパンチのような政治機構の再現などは表立っては見られない一方で、かつての伝統的な社会規範の一部が行動原理となり、社会的レジリエンスを保っているように見える。かつて JB においてその音楽で名をなし、リーダーシップを発揮し尊敬された人物たちの多くが亡くなってしまった現在、そして、グローカル化が進展する世界の社会生活の中で、彼らは自分たちの生きている社会

／コミュニティのあり方をどのように想像していくのか。

JB で行われた、ある人物の盛大な葬儀の途中の休憩の時間に、参列者の一部の人たちとスパーティーク、ウパーティークの話になった時のことである[78]。JB 出身者で、大都市ムンバイで警備会社を共同経営する M 氏は「スパーとウパーというものはだんだんとなくなって行くだろう」というのに対して、ある人物は「私たちは、洗濯人や清掃人たちのカーストとは結婚しないし、食事やお茶もしない。カーストがなくならないと同じようにスパーもウパーもなくならない」と穏やかに言い切った。

7. おわりに

近現代という社会経済的環境変化の激しい時代において、音楽演奏を生業とする伝統的実践共同体が、人間と文化形式の再生産にどのように向き合い、その職能と系譜を維持すると同時にローカルな歴史を形成してきたのかという課題への探求を試みた。

ニューマンは、音楽家のローカルな社会組織を観察し考察することで、彼らのグループ化された行為パターンと社会的アイデンティティの基盤が理解可能になると考え、西ラージャスターンの楽師コミュニティの定量的研究から、(1) 父系出自の原理、(2) 婚姻関係の原理、(3) 村落群の原理を抽出した。そして、都市コミュニティの集団成員性とアイデンティティに関わる出身村落と村落群の原理についての更なる研究の必要について指摘した。本稿では、ニューマンが指摘した 3 つの組織原理を分析概念として援用しつつ、ジャイプル・ビラーダリーの成立の歴史、婚姻関係のネットワークによる親族・婚姻圏と村落群の原理（村落地域圏）に関する民族誌的記述と検討を中心に行った。

ジャイプル・ビラーダリーは都市に形成された社会空間であり、そこでの音楽伝統は近代化とグローバル化の進展に適応するかのように変貌を遂げてきた。一方、その空間を存立させている父系出自に基づく婚姻関係に大きな変化は見られない。出身村落との実質的な社会関係を失った現在においても「出身村落とゴートの組み合わせ」がコミュニティの集団成員性とアイデンティティの指標として想像的に機能しているのである。すなわち、彼らの音楽伝統は社会経済的な環境変化に適応して変化を遂げているが、その社会的アイデンティティは伝統的な組織原理によって維持され、集団としての社会的レジリエンスを保っているように見える。しかし、そのようなマクロな組織原理のみによる行為パターンや社会的アイデンティティについての理解は不十分なものにならざるを得ないと思われる。

本稿の第 6 章においては、彼らの社会規範と行動原理の一端について、ミクロな視点からの検討を試みた。ニューマンや英領インド帝国期の国勢調査に基づく民族誌においては、ダーディー・ミーラースィーのジャーティ／ゴート間での平等性について言及される場合が多いが、村落地域圏や JB における婚姻関係の事例や談話分析から、そのような記述とは異なる組織原理もみられた。すなわち、スパーティークとウパーティークという言葉・概念で

[78] 現地調査より（2019 年 12 月 26 日）。

示される出身村落の分類は、コミュニティ内の階層を再生産し、今日における婚姻関係のあり方を規定している一方で、社会規範としても働き、彼らの行動原理の一部となっていることが明らかになった。

JB の音楽伝統の変化と社会的レジリエンスの関係についての理解は、伝統的組織原理を中心とする社会理論のみからでは困難である。そこでは、アパデュライのいうローカル化をあからさまに志向することなく社会生活における想像力の役割に注目する民族誌が求められるであろう［アパデュライ 2004］。ここでの想像力の主体は、冒頭で述べたようにグローカル化が進展する世界の個人や集団である。そして、そのような社会生活における想像力とは、理論的な言葉では表現されずにイメージや物語や言説のなかに示され、共同で行われるさまざまな慣行を可能にし、広く共有される正統性の感覚を可能にするような共通理解のしかたとしての社会的想像と密接に関係している［テイラー 2011］。

社会的アイデンティティや政治的リーダーシップの源泉は時に伝統にあり、ローカルな世界においてはその伝統が媒介となって日常的実践を成立させつつ、伝統を構造化してきたと言える。しかし、その一方でグローバル化の進展にともなう脱埋め込み現象は、新たな伝統と自己の模索を余儀なくさせ、選択の政治／自己実現の政治としてのライフ・ポリティクスを生じさせる［ギデンズ 2005］。今日における彼らのアイデンティティやリーダーシップのあり方は、伝統的な社会規範とグローカルな生活体験に基づく社会的想像の相互作用のもとにあると考えられる。すなわち、人間と文化形式の再生産は、ローカリティと結びついた行動原理とともに社会環境に適応しつつ想像的に継承されていくということである。本稿では、社会生活における想像力に着目した民族誌に向け、その基盤となる組織原理および行動原理に関する記述と検討に集中した。グローカルな世界におけるライフ・ポリティクスの新たな側面や社会的想像力のあり方の更なる探究については今後の課題としたい。

謝　辞

インドおよびヨーロッパにおいて、今日まで調査にご協力頂いたインフォーマントの皆さんに心より感謝いたします。本稿には、人間文化研究機構・地域研究推進事業『現代インド地域研究』『南アジア地域研究』（国立民族学博物館拠点 MINDAS、代表・三尾稔）からの継続的な渡航助成、および科研費基盤研究（C）「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究（研究代表・田森雅一、2018–2020 年）」による調査の成果の一部が含まれています。また、本稿の加筆修正に際し、査読者および担当編集者から有意義なご指摘を頂きました。ここに感謝の意を表します。

巻末資料

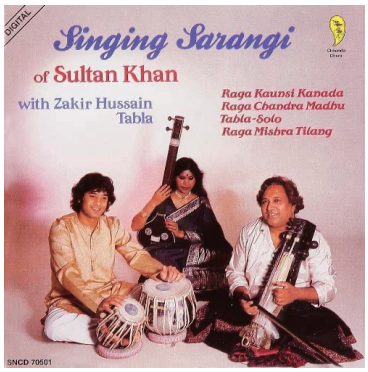


写真 4 サーランギー奏者スルターン・ハーン（左）（*Singing Sarangi*, 1988, Chhanda Dhara より）。

写真 5 タブラーを演奏するファイヤーズ・ハーン（Harsh Wardhan.com より）。

写真 6 サーランギーを演奏するムニール・ハーン（Nicolas Magriel, *Sarangi Rangi* より）。

写真 7 アブドゥル・ガフール・カーワーの写真（2011 年 12 月、ジャイプルにて田森撮影）。

写真 8 アブドゥル・ガフール・カーワーの妻（左）とその妹。二人は「K 村のチュンカル家」から「G 村のカーワー家」に嫁いだ姉妹である（2016 年 12 月、ジャイプルにて田森撮影）。

写真 9 シタールを教授するアマーナト・アリー・カーワー（2014 年 9 月、パリにて田森撮影）。

写真 10 若手の歌謡グループ。カウワーリー、映画歌謡、ラージャスターン民謡などをレパートリーとしている。中央は、人気番組「インディアン・アイドル」のファイナリストとなったナウシャド・アリー・カーワー（2014 年 9 月、パリにて田森撮影）。

写真 11 K 村の旧領主の邸宅
（2015 年 12 月、K 村にて田森撮影）。

写真 12 チュンカル家の家屋
（2015 年 12 月、K 村にて田森撮影）。

写真 13 チュンカル家の屋上からの K 村の眺望（2015 年 12 月、K 村にて田森撮影）。

写真 14 鍵盤楽器ハルモニウムを演奏しながら歌唱するナースィルジー（左）。右の楽器はタブラー（2017 年 12 月、ディードワーナー市にて田森撮影）。

写真 15 クリシュナ神とラーム・ピールの絵画
（2015 年 12 月、K 村にて田森撮影）。

写真 16 葬儀中の集会風景
（2015 年 12 月、ナーガウル県 A 村にて田森撮影）。

参考文献

（日本語文献）

アパデュライ、アルジュン、2004、 『さまよえる近代―グローバル化の文化研究』、門田健一（訳）、平凡社。

井狩弥介・渡瀬信之（訳注）、 2002、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』、平凡社。

井上貴子、2012、「インドにおける「フォーク」概念の変遷と特徴」、『民謡から見た世界音楽―うたの地脈を探る』、細川周平（編著）、37-51 頁、ミネルヴァ書房。

小尾淳、2020、『近現代南インドのバラモンと賛歌―バクティから芸術、そして「文化資源」へ』、青弓社。

ギデンズ、アンソニー、2005、『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会』、秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也（訳）、ハーベスト社。

クロー、アンドレ、2001、『ムガル帝国の興亡』、岩永博監・杉村裕史（訳）、法政大学出版会。

小牧幸代、2000、「北インド・ムスリム社会のザート・ビラーダリー・システム―ムスリム所集団の序列化と差異化に関する一考察」、『人文学報』、83 号、275-313 頁。

鹿野勝彦、1977、「社会人類学におけるジャジマニ・システム論の問題点」、『アジア・アフリカ言語文化研究』、13 号、154-168 頁。

田森雅一、2011、「近代北インド古典音楽における社会音楽的アイデンティティの構築―英領インド帝国期の『カースト統計』と『ナウチ関連問題』を中心に」、『国立民族学博物館研究報告』、35 巻 4 号、583-615 頁。

_____、2012、「宮廷から公共へ―インドにおける伝統音楽教育の近代化と国民音楽の形成」、『埼玉大学教養学部紀要』、48 巻 1 号、147-167 頁。

_____、2013、「インド音楽の近代化とマスメディア―ラジオ放送が北インド古典音楽と音楽家の生活世界に与えたインパクト」、『国立民族学博物館研究報告』、36 巻 4 号、359-391 頁。

_____、2015、『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容―『音楽すること』の人類学的研究』、三元社。

_____、2016、「インドにおける衛星放送のグローカル化―音楽リアリティ番組の新世代世襲音楽家へのインパクト」、『埼玉大学紀要』、52 巻 1 号、139-150 頁。

_____、2018、「花街で育まれた音楽」、『インド文化事典』、インド文化事典編集委員会編、丸善出版、530-531 頁。

_____、2021a、「越境し環流する音楽文化―フランスにおけるインド伝統音楽の再帰的グローカル化」、松川恭子・寺田吉孝（編著）『世界を環流する〈インド〉―グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』、青弓社、44-71 頁。

_____、2021b、「環流現象と音楽伝統の変容―インドとフランスを結ぶ再帰的グローカル化の諸相」、『文明 21』、46 号、51-70 頁。
テイラー、チャールズ、2011、『近代―想像された社会の系譜』、上野成利（訳）、岩波書店。
深沢宏、1972、『インド社会経済研究』、東洋経済新報社。
ロビンソン、フランシス、2009、『ムガル皇帝歴代誌―インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王朝の興亡（1206−1925）』、小名康之（監修）・月森左知（訳）、創元社。

（外国語文献）

Ahmad, Imtiaz, 1976, “Caste and Kinship in a Muslim Village of Eastern Uttar Pradesh,” in Imtiaz Ahmad (ed.) *Family, Kinship and Marriage among Muslims in India*. New Delhi: Manohar, pp. 319-345.

Alavi, Hamza A., 1976, “Kinship in West Punjab villages,” in T. N. Madan (ed.) *Muslim Communities of South Asia: Culture and Society*. New Delhi: Vikas Publishing House, pp. 1-27.

Allami, Abul-Fazl, 1994, Ā*'īn-i Akbarī*. Translated by H. Blochmann (vol. 1) and H. S. Jarrett (vol. 2 & 3). Delhi: D. K. Publishers.

Arya, R. P. (eds.), 2010, *Jaipur City Atlas*. Jodhpur: Indian Map Service.

Khan, Azizuddin, 2000, *My Life: Khansahib Alladiya Khan*. Calcutta: Thema.

Bahadur, Etee, 2011, *History of the Jats: A Study of Jats in Western Rajasthan*. Gurgaon: Shubhi Publication.

Bahura, Gopal N., 1976, *Literary Heritage of the Rulers of Amber and Jaipur*. Jaipur: City Palace.

Bor, Joep, 1987, *The Voice of the Sarangi: An Illustrated History of Bowing in India*. Bombay: National Centre for the Performing Arts.

Chaudhri, Pratap Singh, 1995, *Rājasthān: Saṅgīt aur Saṅgītkār*. Jaipur: Prakashan Vibhag (in Hindi).

Cole, B.L., 1932, *Census of India 1931: Vol. XXVII: Rajputana Agency, Report and Tables*. Meerut: Government of India (Saraswati Press).

Erdman, Joan L., 1978, “The Maharaja's Musicians: The Organization of Cultural Performance at Jaipur in the 19th Century,” in S. Vatuk (ed.) *American Studies in the Anthropology of India*. New Delhi: Manohar Publications, pp. 342-367.

_____, 1985, *Patrons and Performers in Rajasthan: The Subtle Tradition*. Delhi: Chanakya Publications.

Gahlot, Sukhvir Singh and Banshi Dhar, 1989, *Caste and Tribes of Rajasthan*. Jodhpur: Jain Brothers.

Ikram, S. M., 1964, *Muslim Civilization in India*. New York: Columbia University Press.

Jain, Kailash Chand, 1972, *Ancient Cities and Towns of Rajasthan: A Study of Culture and Civilization*. Delhi: Motilal Banalsidass.

Kothari, Komal, 1972, *Monograph on Langas: A Folk Musician caste of Rajasthan*. Jodhpur: Rupayan

Sansthan.

_____, 1973, “The Langas,” *Sangeet Natak*, (27): 5-26.

_____, 2001(1994), “Musicians for the people: The Manganiyars of Western Rajasthan,” in K. Schomer, J. Erdman, D. Lodrick and L. Rudolph (eds.) *The Idea of Rajasthan: Explorations in Regional Identity*. New Delhi: Manohar Publications, pp. 205-237.

Magriel, Nicolas, 2021, *Sarangi Style in Hindusthani Music*. London: iMerc.

McNeil, Adrian, 2004, *Inventing the Sarod: A Cultural History*. Calcutta: Seagull.

Neuman, Daniel M., 1990, *The Life of Music in North India: The Organization of an Artistic Tradition*. Chicago: The University of Chicago Press.

_____, 2010, “Dhadhis and Other Bowing Bards,” in Joep Bor et al. (eds.) *Hindustani Music: 13-20th Century*. New Delhi: Manohar, pp. 253-265.

_____, 2015, *Studying India’s Musicians: Four Decades of Selected Articles*. Delhi Manohar.

Neuman, Daniel and Shubha Chaudhuri with Komal Kothari, 2006, *Bards, Ballads and Boundaries: An Ethnographic Atlas of Music Traditions in West Rajasthan*. Calcutta: Seagull Books.

Roy, Ashim Kumar, 2008, *History of the Jaipur City*. New Delhi: Manohar

Sharma, Prem Lata (ed.), 1992, *Bṛihaddeśī of Sri Mataṅga Muni (vol.1)*. New Delhi:Indira Gandhi National Centre of the Arts.

Singh, K. S., 1998, I*ndia’s Community, People of India (National Series, vol. 4-6)*. Oxford and New York: Oxford University Press.

Singh, M. H., 1990, *The Castes of Marwar, Being Census Report of 1891*, reprint with an introduction by Komal Kothari. Jodhpur: Books Treasure.

Snodgrass, Jeffrey G., 2006, *Casting Kings: Bards and Indian Modernity*. New York: Oxford University Press.

Tamori, Masakazu, 2008, “The Transformation of Sarod Gharānā: Transmitting Musical Property in Hindustani Music,” in Yoshitaka Terada (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan*, Senri Ethnological Studies 71: 169-202.

（Web 資料）

Harsh Wardhan.com（https://www.wardhan.com/Ustad_Faiyyaz_Khan.html、最終閲覧日：2021 年 11 月 24 日）

Nicolas Magriel, Sarangi Rangi（http://www.sarangi.net/sarangi-players-k-m-with-video/209-munir-khan-2、最終閲覧日：2021 年 11 月 24 日）

南アジア地域研究国立民族学博物館拠点 (MINDAS)　ワーキングペーパー　No.5
田森雅一　近現代インドにおける音楽伝統と社会的レジリエンス
　　―ラージャスターン世襲楽師コミュニティの民族誌に向けて―

2022 年 2 月 10 日発行

編集・発行　南アジア地域研究国立民族学博物館拠点
　　〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館
印刷・製本　中西印刷株式会社
　　〒602-8048 京都府京都市上京区下立売通小川東入ル

本書のコピー・スキャン・デジタル化などの無断複製を禁じます。
ISBN 978-4-9912238-5-3

ISBN 978-4-9912238-5-3

MINDAS Series of Working Papers | 05